第１章

那須塩原市の概要

第１章　那須塩原市の概要

１　自然的・地理的環境

（１）那須塩原市の位置・面積

本市は栃木県の北部に位置し、東京都から 150km 圏、宇都宮市からは約 50km の距離にあり、広大な那須野が原の北西一帯を占めています。

市の面積は 592.74 ㎢で、西部に高原山、北部に大佐飛山や那須連山の最高峰三本槍岳などの山岳部があります。面積の約半分を占める山岳部は日光国立公園を形成し、塩原温泉郷と板室温泉、三斗小屋温泉の温泉地を有し、初夏の新緑、秋季の紅葉など四季折々の多彩な表情を持っています。

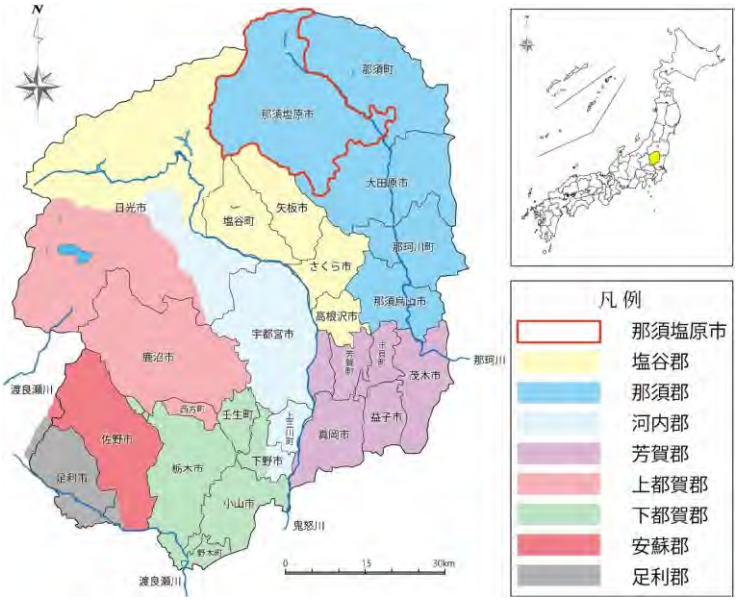
市域の南東部は、那珂川や箒川などにより形成された緩やかな傾斜の平地が広がる複合扇状地であり、扇頂部には本州有数の酪農地帯、扇央部から扇端部には田園地帯が広がっています。

標高は、最高地点が三本槍岳山頂の 1,917ｍ、最低地点は最南部の約 210ｍとなっており、約 1,700ｍの標高差があります。

また、市域を南西から北東にかけて JR 東北新幹線・JR 宇都宮線・東北縦貫自動車道及び国道４号の幹線道が縦貫しており、JR 西那須野駅・JR 那須塩原駅・JR 黒磯駅を中心に市街地が広がっています。

■　那須塩原市の位置

■ 栃木県行政分布及び旧郡界



■ 那須塩原市の河川

（2）地名

明治 22 年（1889）の町村制の施行により、本市の基礎となる高林村・鍋掛村・東那須野村・西那須野村・狩野村・塩原村・箒根村が誕生しました。また、明治 45 年（1912）に、東那須野村からの分立により黒磯町が誕生しました。

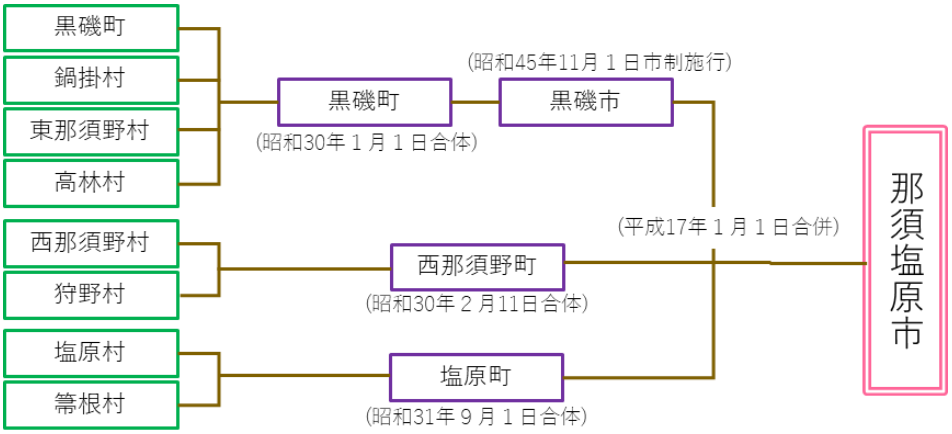
大正 8 年（1919）には塩原村が町制施行により塩原町となり、昭和 7 年（1932）には西那須野村が町制施行により西那須野町となりました。

昭和時代に入り、1950 年代に進められた「昭和の大合併」により、昭和 30 年（1955）に黒磯町・鍋掛村・東那須野村・高林村が合併して黒磯町が誕生し、西那須野町と狩野村が合併し、西那須野町が誕生しました。翌年の昭和 31 年（1956）には、塩原町と箒根村が合併し、塩原町が誕生しました。

また、昭和 45 年（1970）には黒磯町が市制施行により黒磯市となり、昭和 57 年（1982）には塩原町が塩谷郡から郡界変更により那須郡となりました。

平成時代に入り、地方分権一括法による合併特例法の改正によって、平成 11 年（1999）から平成 22 年（2010）にかけて多くの自治体の合併が行なわれた、いわゆる「平成の大合併」の際、平成 17 年（2005）1 月 1 日、黒磯市・西那須野町・塩原町の 3 市町の合併により、本市が誕生しました。

■ 合併の変遷



■ 那須塩原市の旧行政区分

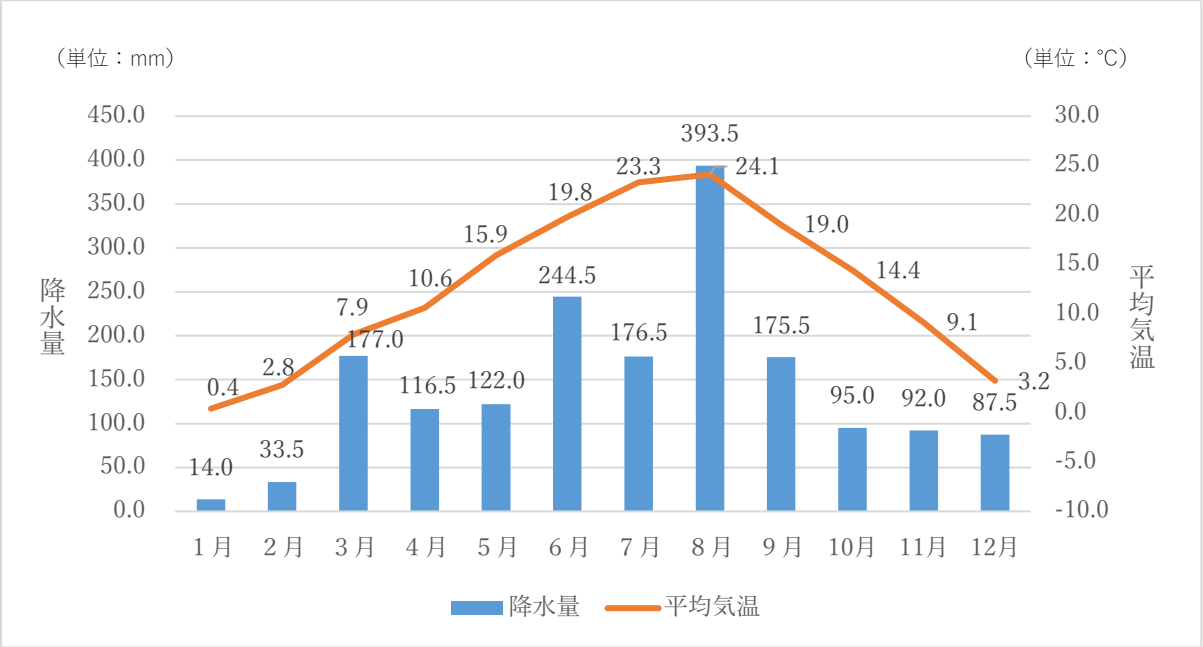
（3）気候

本市は、高原性の冷涼な気候であるといわれていますが、令和３年(2021)の年間平均気温は 12.5℃、最高気温は７月に 34.9℃を記録しました。一方、最低気温は１月に－10.9℃が記録され、夏季と冬季の寒暖差は 40℃以上あります。

降水は夏季に多く、近年の年間降水量はおおむね 1,200 ㎜～ 1,900 ㎜で推移しています。夏季には雷雨の発生が多いのも特徴です。冬季には山地を中心に積雪があり、４月下旬でも一部の地域には残雪が見られます。

また、那須野が原では、冬季に「那須おろし」「高原おろし」と呼ばれる北西からの強い季節風が吹き、倒木などの被害が出ることもあります。

■ 降水量と平均気温（2021 年）



旧青木家那須別邸

2　社会的状況

（1）人口動態

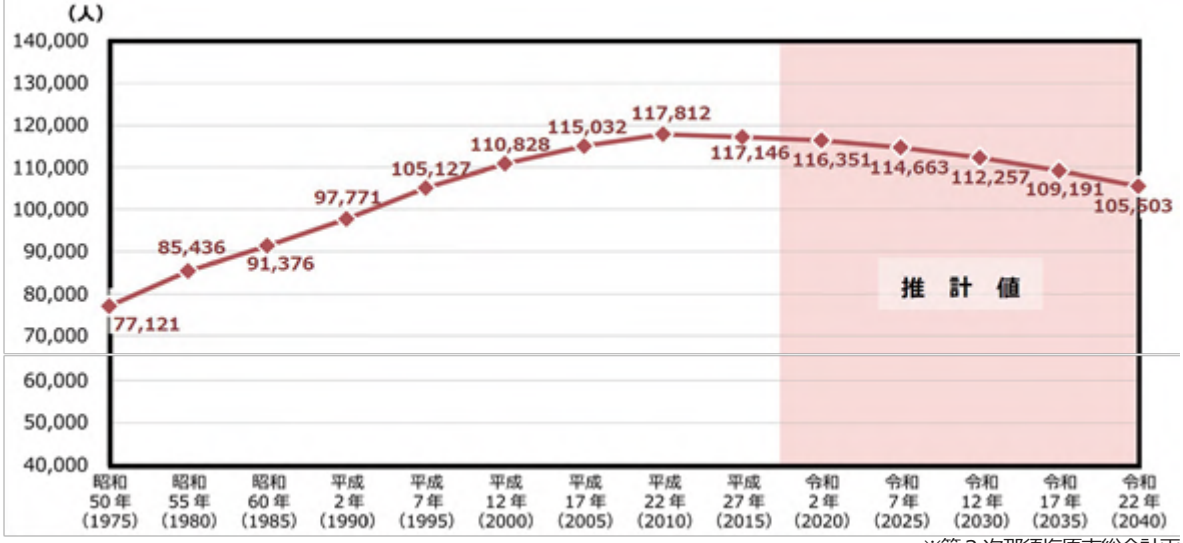
本市は、豊かな地域資源を持っており、農業・観光・産業などのバランスも良く、また交通の要衝として発展してきました。しかしながら、今後は全国的な地域課題である人口減少・少子高齢化とそれに伴う福祉比重の増大や、生産年齢人口の減少に伴う経済の停滞などが懸念されています。

①総人口と世帯数

令和 2 年（2020）の国勢調査による本市の総人口は 115,210 人であり、平成 22 年（2010）の 117,812 人に対し 2,602 人減少しました。

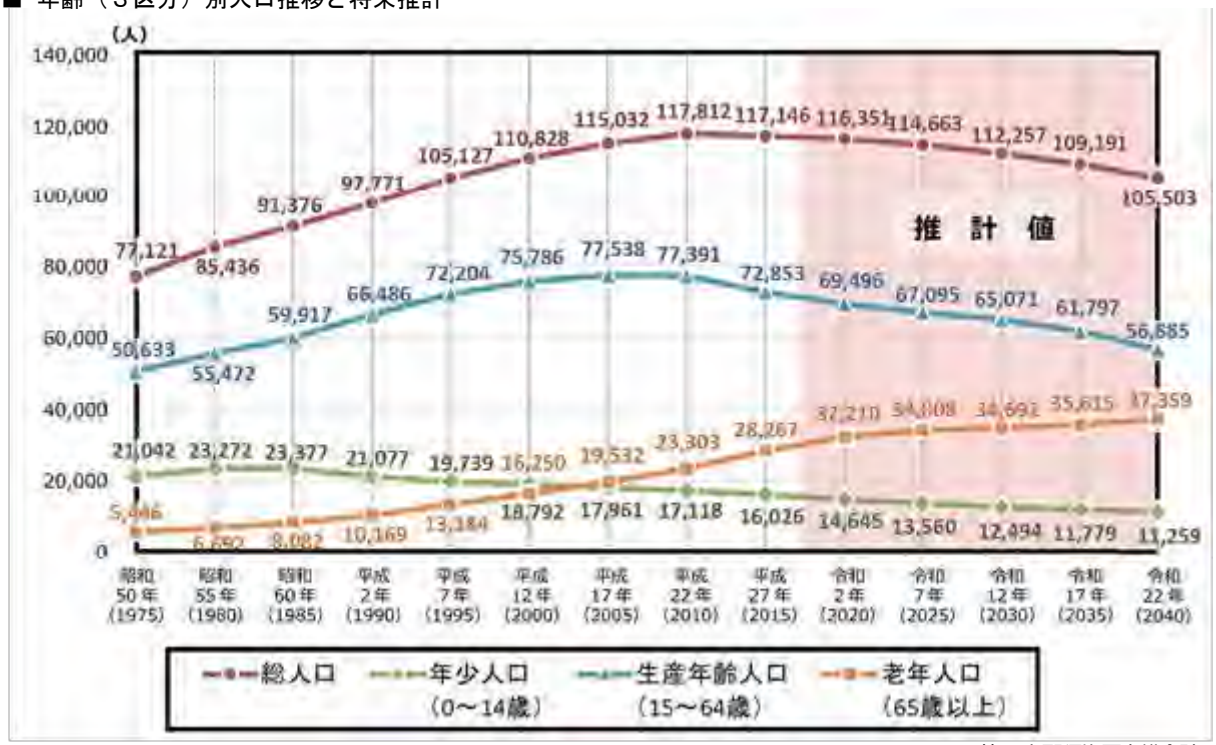
平成 27 年(2015)の国勢調査の結果を基にした将来推計では、本市の総人口は令和 22 年（2040）に 105,503 人になる見込みであり、緩やかに減少する予測となっています。

■ 人口推移と将来推計



※第２次那須塩原市総合計画

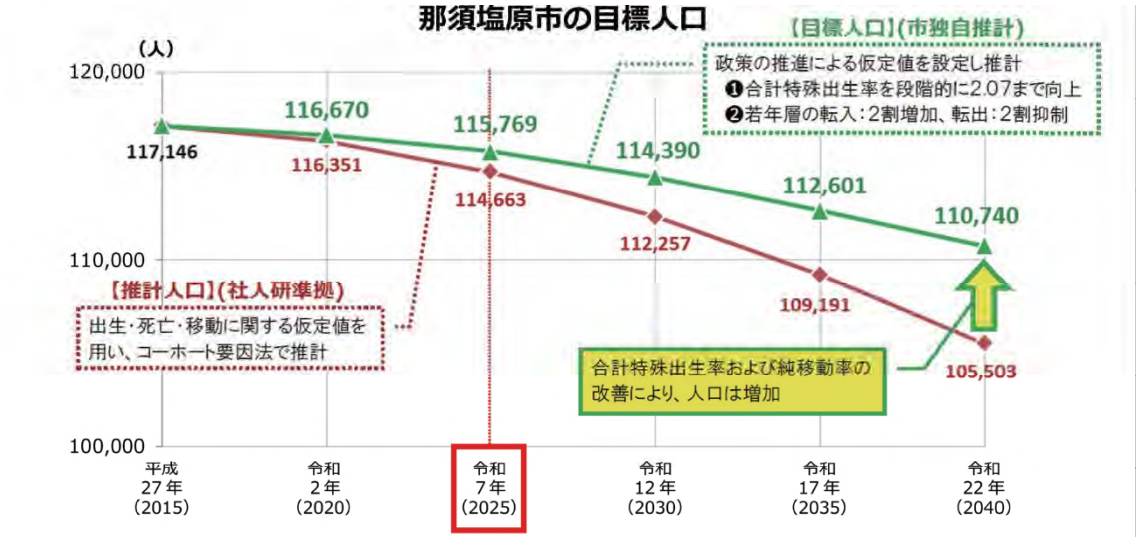
■ 年齢（３区分）別人口推移と将来推計



※第２次那須塩原市総合計画

第２次那須塩原市総合計画における人口ビジョンでは、合計特殊出生率と転入転出に関する数値の改善により、令和７年（2025）における本市の目標人口を約 115,800 人としています。
（※第２次那須塩原市総合計画については、後期基本計画を令和４年度に策定予定。）

■ 目標人口



※第２次那須塩原市総合計画

②地区（旧市町村区）別人口と分布傾向

本地域計画において、今後の歴史文化資源の活用や維持に関し、市民協働や地域自治を検討する上で念頭に置くべき地区（旧市町村区）に合わせて、地域別人口を集計しました。

本市における人口集中地区（DID）は、JR 黒磯駅周辺と JR 西那須野駅周辺の２か所あります。JR 黒磯駅周辺では平成 12 年以降３％前後で人口は減少しており、平成 27 年度（2015）のデータでは１㎢当たり 3508.2 人となっています。一方、JR 西那須野駅周辺では３％から８％程度の人口増加を続けています。

■ 地区・地域別人口・世帯数（令和３年４月１日現在）

地域名	総数	男性	女性	世帯数	平均世帯人員
黒磯地区	36,428	17,873	18,555	16,089	2.26
東那須野地区	12,159	6,044	6,115	5,068	2.39
高林地区	5,782	3,010	2,772	2,412	2.39
鍋掛地区	6,796	3,408	3,388	2,778	2.44
西那須野地区	19,531	9,876	9,655	8,213	2.37
狩野地区	29,468	14,851	14,617	13,127	2.24
塩原地区	1,763	865	898	952	1.85
箒根地区	5,089	2,532	2,557	2,134	2.38
総数	117,016	58,459	58,557	50,773	2.30

※那須塩原市統計書（令和３年版）

（2）産業

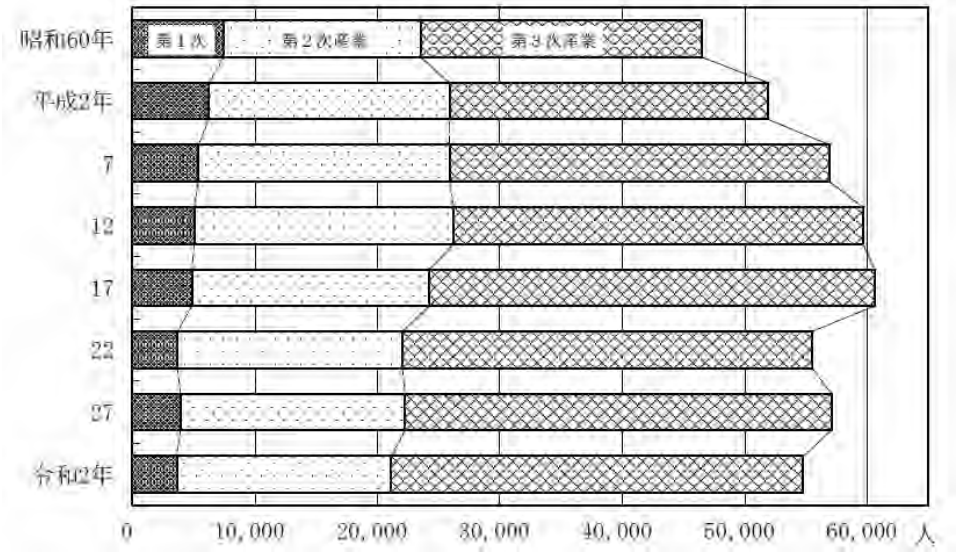
本市には、多彩な産業がバランス良く立地しています。

農業では、「生乳生産本州一のまち」としての地域を築いている酪農を始め、ほうれんそう・大根などの高原野菜や食味ランキングで「特 A」の評価を受けている銘柄もある水稲、夏から秋にかけて収穫される夏秋どりいちごなど、特色ある作物が生産されています。

商業では、JR の駅周辺や国道４号などの幹線道路周辺の市街地に立地する食料品店、飲食店、自動車販売店などに加え、アウトレットモールや複合型映画館（シネマコンプレックス）を併設した大型ショッピングモールなどの大型商業施設も進出しています。

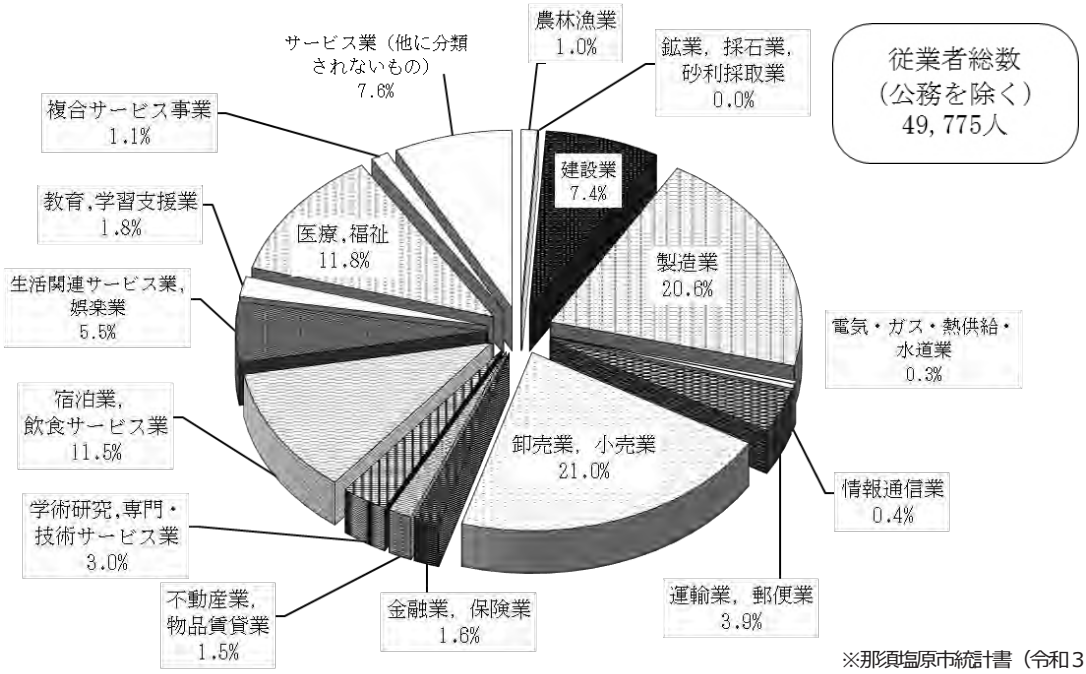
工業では、工業団地・産業団地に加え、タイヤ、飲料品、乳製品、畜産加工品などの工業が立地し、大手企業の生産拠点となっています。

■ 産業別就業（15 歳以上）人口（国勢調査）（令和２年(2020)年 10 月１日現在）



※那須塩原市統計書（令和３年版）

■ 産業（大分類）別従業者数（平成 28 年(2016)年６月１日現在）

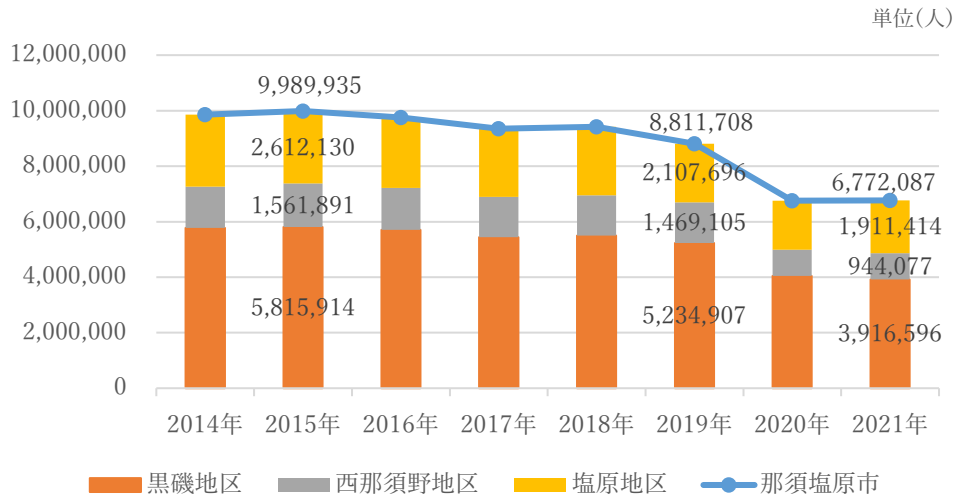


※那須塩原市統計書（令和３年版）

（3）観光

本市の観光客入込数は、平成 27 年（2015）以降、平成 29 年（2017）まで減少し、平成 30 年（2018）年に横ばいとなったものの、令和元年（2019）年に減少し、さらに令和 2 年（2020）、令和 3 年（2021）は新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、令和元年と比べ 2 割程度減少しています。地区別で見ると、黒磯地区が最も多く、市全体の 57.8%（令和 3 年（2021）実績）を占めています。これは、黒磯地区にある「那須ガーデンアウトレット」の集客力に起因します。

■ 本市（地区別）観光客数の推移

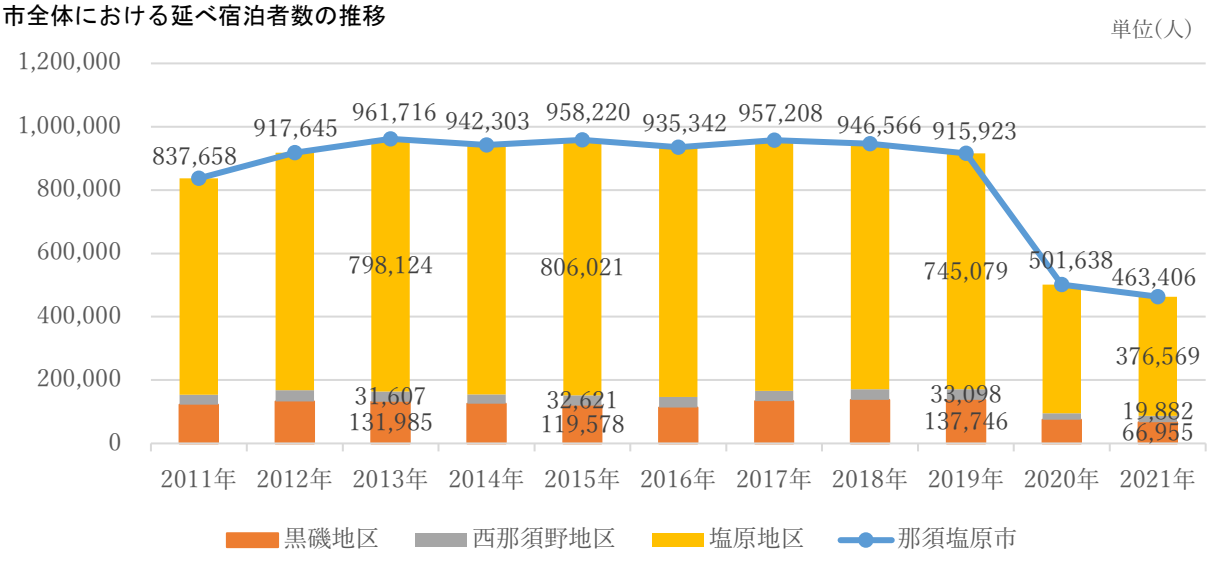


※那須塩原市観光マスタープランの内容に令和２年、令和３年の本市発表資料の内容を追記

本市の宿泊者数は、平成 23 年（2011）に発生した東日本大震災以降、平成 25 年（2013）までは回復傾向が見られ、令和元年（2019）までは 90 万人を超えていましたが、新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、令和 2 年（2020）、令和 3 年（2021）は令和元年の半数程度まで減少しています。

本市の延べ宿泊者数は、新型コロナウイルス感染症の流行前である令和元年（2019）までは観光客入込数の約 1 割程度に当たりました。令和元年の地区別宿泊者の割合は、塩原地区 81.3%、板室温泉を含む黒磯地区 15.0%、西那須野地区 3.6%です。最も宿泊者数の多い月は 8 月であり、12 月から 2 月までの期間と 6 月が少ない状況です。

■ 市全体における延べ宿泊者数の推移



※那須塩原市観光マスタープランの内容に令和２年、令和３年の本市発表資料の内容を追記

3　歴史的背景

❶　自然「大地の成り立ちと特徴」

（1）海底から扇状地へ

今から 1,500 万年前、日本列島はまだその形を現しておらず大部分が海底でした。那須塩原市も大佐飛山塊の一部を除き、海底にありました。この海底にあった時代の堆積物が、那須塩原の大地の基となりました。

やがて時が流れ、日本列島が今の姿になるころには、大地に大きな力が働いて海底が隆起し、那須塩原付近も陸地になっていきました。陸になった那須野が原には大河が流れ、水を湛えた大きな湖もあったと考えられています。さらに大河や湖は那須や高原といった火山の活動による噴出物で埋められていき、大きく姿を変えました。そして那珂川・蛇尾川（さびがわ）・箒川などの河川が谷を刻み土砂を堆積させて、広大な扇状地を形成していきました。

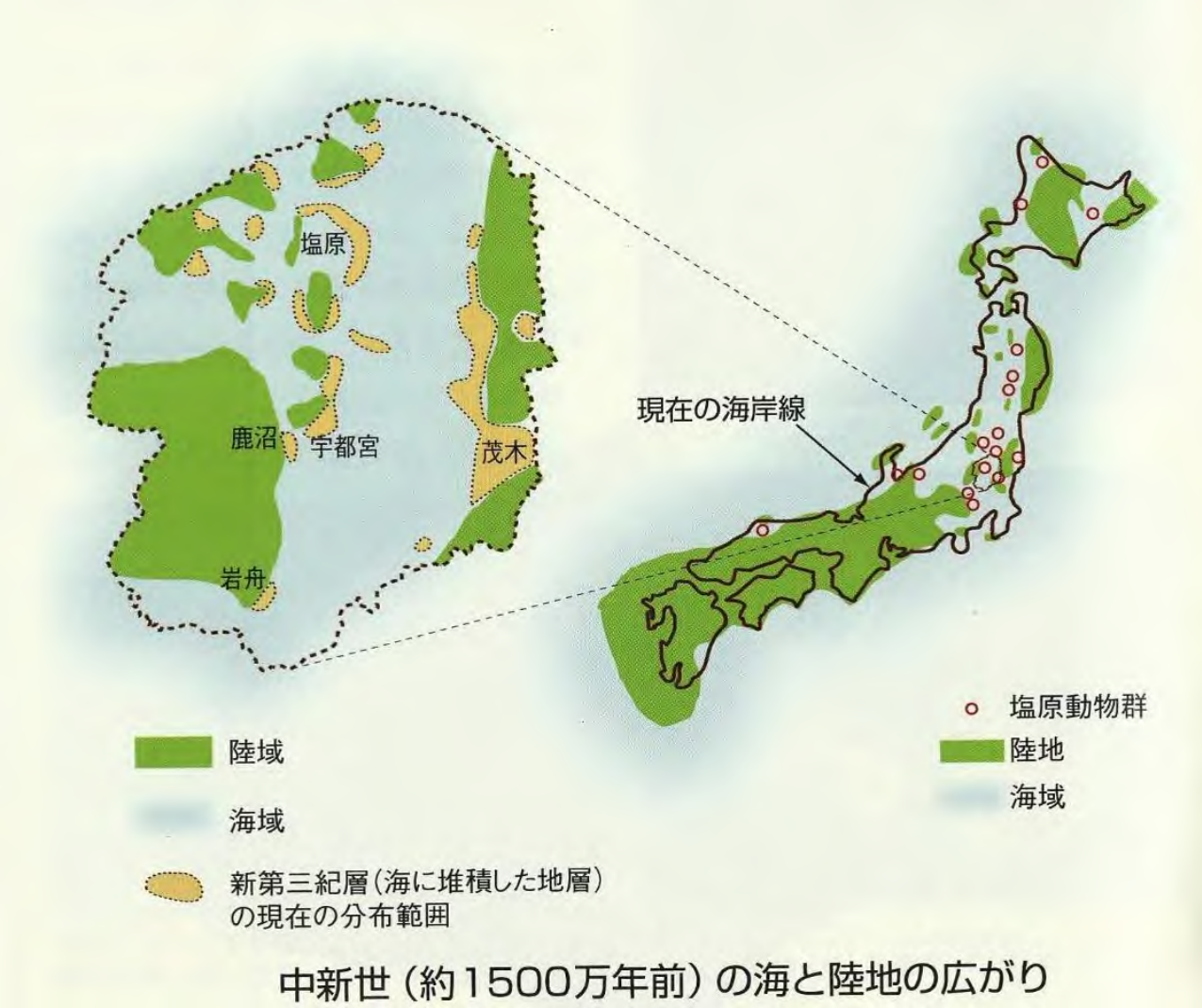
①塩原の景観を作った海の時代

那須塩原市の付近は、かつて海の底にありました。日本海が拡大して日本列島の原型となる島々が大陸から分離したのち、この付近では八溝山地や大佐飛山塊などが島となっていた以外は、一面海に覆われていました。やがて海底火山の活動が活発になり、溶岩や軽石、火山灰などの火山噴出物が海底に堆積しました。火山に近かった宇都宮付近では、軽石を多く含んだ粒の粗い火山灰が堆積し、有名な大谷石の地層を形成します。那須塩原付近では、それより粒の細かい軽石や火山灰が堆積して、特徴的な緑色をした凝灰岩（福渡層）となりました。これが箒川沿いに見られる天狗岩や野立岩、また、その周辺の渓谷沿いに見られる美しい景観を作り出したのです。その際、岩石の割れ目に沿って、地下からマグマが上がってきました。しかしそれは地上へと噴出することなく地下で固まりました。それが材木岩などに代表される貫入岩です。やがて火山の活動が収まると、海底には数百万年かけて穏やかに泥や砂が堆積していきました（鹿股沢層）。その海は貝類などをはじめとする海棲動物の生活の場でもありました。それらの生物の遺骸は海底に堆積してやがて化石となり、現在は箒川やその支流の河岸などで見つけることができます。天然記念物の大黒岩もこの時代の岩石です。これら鹿股沢層から見つかる化石は専門家から「塩原動物群」とよばれ、塩原地域はこの時代の日本の代表的な化石の産地として国内外の研究者に知られています。土地が隆起して海退が進むと、火山灰のほかに木の葉や木の枝などより陸地に近い化石を含んだ泥や砂の層（関谷層）が堆積するようになり、那須塩原は日本列島の内陸部へと変わっていきました。塩原の美しい景観は、このような岩石たちによって作られているのです。

天狗岩（福渡層）

鹿股沢層

鹿股沢層の貝化石



※「とちぎの化石図鑑」：とちぎの化石図鑑編集委員会［編］、随想舎、作図：栃木県立博物館

②湖の時代と火山活動

陸地となった那須塩原一帯は、やがて侵食の場となりました。河川による侵食で海だった時代の地層は削り取られ、大きな谷地形を形成しました。谷の東は八溝山地に、西は大佐飛山塊や関谷断層に限られた南北に伸びた地溝のようなものだったと考えられています。河川は、今とは異なり福島県側から南に向かって流れていました。この川は、那須野が原付近にあった大きな湖に注いでいました。湖から流れ出た水は、当時の鬼怒川へと合流していたと思われます。

160 万年ほど前から今の福島県会津地域にあった火山の活動が活発になり、盛んに火砕流を噴出していました。その一部は、当時那須火山がまだ活動していなかったこともあり、障壁となるものがなかった栃木県側へも達し、那須野が原の湖底にも堆積しました。那須町ではこの火砕流堆積物が芦野石として採石されています。50 万年前には那須火山群と高原火山群の活動も始まりました。那須火山群からは、角礫と火山灰などからなる岩屑なだれが幾度も起き、那須野が原の北部から東部にかけて岩屑なだれ堆積物が堆積しました。高原火山群は、30 万年ほど前に大噴火を起こして大量の火砕流を噴出し（大田原火砕流堆積物）、軽石を含んだ火砕流堆積物が西部から広く那須野が原を覆うように堆積しました。そのため地下のマグマだまりが空洞化して山体が落ち込み、塩原カルデラが形成されまし

た。これら一連の火山活動により南側への流路を失った河川は、東側（茨城県側）へ流路を変えたと考えられています。やがて、湖はすっかりその姿を消してしまいました。

高原火山群

那須火山群

火砕流堆積物

約 100 万年前の那須野が原付近（想像図）

③日本最大級の扇状地の形成

これまで河川が刻んできた谷や丘などの地形は、火砕流堆積物に覆われすべて平坦な地形になってしまい、さらに那須火山の噴火により福島県との境に丘陵地形ができたため、福島県側からの河川の流入はなくなりました。新たな河川は、大田原火砕流堆積物が流れ下った傾斜に沿って、那須野が原を北西から南東に向けて流れるようになりました。これらの河川は、蛇行して流路を自由に変えながら火砕流堆積物の表面を削っていき、深い谷を刻みながら流れました。この間も那須野が原の西端にある関谷断層は活動していて、那須野が原は相対的に西側が沈み込むように動いていました。那須野が原北東部の寒井や蜂巣付近に見られる、頂部が平坦な段丘地形はこの頃（20 万年～15 万年前）形成さ

れました。河川の削り残した部分は、川の中州のような形の丘となり、やがて烏ヶ森や稲荷山・藤荷田山・権現山などの丘陵地形を形成しました。

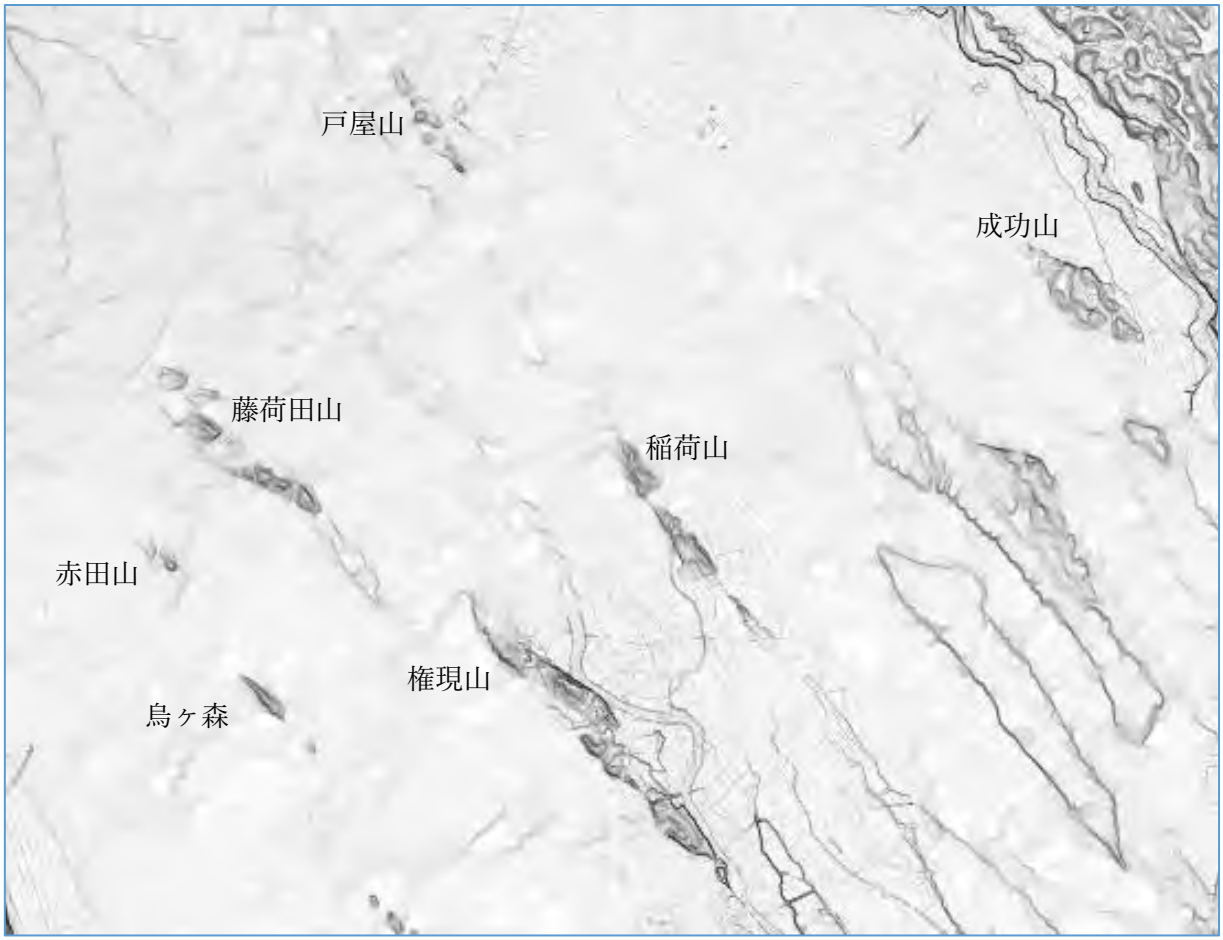
氷期となり、森林限界高度が下がり山地が保水力を失うと上流部の河川は水量が減少するため、土砂の運搬能力が低下し那須野が原は堆積の場へと変わりました。那珂川や蛇尾川（さびがわ）、箒川などの河川は、蛇行を繰り返しながら大きく流路を変えて、運搬してきた礫を下流に押し流せずに次々と堆積していき、やがて（3.2 万～2.7 万年前）那須野が原一帯は扇状地（主扇状地面）となっていきました。

最終氷期の極大を迎えるころ（2.7 万～1.3 万年前）になると、土砂の堆積量はさらに増加し、那須野が原の北西部では堆積作用が、南東部では侵食作用が卓越するようになりました。そのため、扇頂から扇央にかけてはさらに礫が厚く堆積し、扇端にかけては主扇状地面を侵食しながら礫を堆積し、主扇状地面とは傾斜の異なる扇状地（新期扇状地面）を形成していきました。この二重構造の扇状地のため扇頂から扇央にかけての地域は、礫層が厚く透水性の高い土地となりました。

蛇尾川

扇状地礫層

権現山丘陵



那須野が原に見られる丘陵地形（部分）　地理院地図を利用

（2）自然の恩恵・温泉

那須塩原市には、塩原温泉や板室温泉、三斗小屋温泉などをはじめ、いくつかの温泉があります。温泉は、自然が私たちにもたらしてくれた恩恵の一つです。温泉には、火山の熱によって地下水が温められてできたものと、地温勾配によって地下水が温められてできた温泉があります。ここでは、昔から利用されている上に挙げた３か所の温泉について扱います。

①塩原温泉

塩原温泉は、箒川渓谷沿いに細長く伸びて分布しています。温泉の特徴としては、泉質が豊富なことです。塩原地域には、海だった時代の地層が広く分布しています。それらが隆起して陸になったとき、大きな力が働き岩石には大小無数の亀裂ができました。その亀裂に長い時間をかけて河川水や雨水がしみ込んでいき、岩石中の様々な成分を溶かし込んだ水ができました。これが地温で温められたものが温泉となります。熱源は高原火山の地下にあるマグマです。新湯の噴気帯付近を除けばすっかり活動が収まったように思える高原火山ですが、れっきとした活火山です。地下にはまだ熱を持ったマグマが存在しています。木の葉石でおなじみの塩原湖成層も地下水の貯留に大いに役立っています。これもやがて温泉となっていきます。様々な岩石が分布し、湧出する深さが異なることなどが、塩原の泉質が豊富なことの一因です。まさに自然の恵みといえます。

②板室温泉

板室温泉は、那珂川の上流に川の流れに沿うように湧出しています。那須火山群に近いことから火山性の温泉と思われがちですが、温泉は塩原温泉同様に、第三紀とよばれる海だった時代の岩石の亀裂にしみ込んだ河川水や雨水が岩石からの様々な成分を取り込み、地下で温められてできたものです。火山性温泉に特徴的な酸性泉や硫黄泉がないことからもそれが分かります。そのため、火山性温泉と異なり源泉の温度が低いのです。北東にある那須火山群との間には、関谷断層とよばれる活断層があるのも影響を受けていない一因といえるでしょう。

③三斗小屋温泉

三斗小屋温泉は、那須塩原市の飛地として那須岳（茶臼岳）の南西部に位置しています。那須火山群の地下のマグマの熱によって温められた温泉です。一般的な那須温泉が茶臼岳の南東麓にあるのに対して、三斗小屋温泉はその南西側に位置しているのが特徴です。そのため地下に分布している地層も異なり、泉質は単純温泉になっています。源泉の中には、酸性泉など泉質の異なるものも存在します。これは、温泉の湧出する深度や温泉水の水脈付近の地質に左右されるものです。

塩原温泉

板室温泉

三斗小屋温泉

那須塩原市の泉質一覧

温泉地名		泉質									
		単純温泉	塩化物泉	炭酸水素塩泉	硫酸塩泉	含鉄泉	酸性泉	硫黄泉	硫黄泉（硫化水素型）	その他	未分析
塩原温泉	大網				○						
	福渡	○	○	○	○						○
	塩釜	○	○	○	○						
	塩の湯	○	○								
	畑下	○	○	○							○
	門前		○	○	○						
	古町	○	○	○							○
	中塩原	○	○	○						○	
	上塩原	○	○	○	○						
	須巻	○	○	○							○
	袖が沢甘湯	○		○	○		○		○		○
	新湯	○			○		○	○	○	○	
	元湯		○	○				○	○		
板室		○	○		○						○
三斗小屋		○									○
西那須野		○	○	○							
東那須野			○		○						
黒磯			○		○						
油井			○	○							
鳴内		○									
青木			○		○						
亀山			○		○						
鍋掛		○									○
関谷		○	○	○	○						

※源泉所在地に基づく分類のため、各温泉地に利用施設があるとは限りません。
「とちぎの温泉ガイドブック 2020」栃木県保健福祉部薬務課（2020 年 3 月）より抜粋

地質年代表と那須塩原の主な出来事

時代区分 地質時代			年代	地層	那須野が原の変遷
第四紀	完新世		現在	砂礫層・火山灰層	
			1.2 万年前		
	更新世	後期	3 万年前	扇状地堆積物	扇状地の形成
				御富士山岩屑なだれ	
		中期	15 万年前	段丘堆積物	河岸段丘の形成
				那珂川岩屑なだれ	
				黒磯岩屑なだれ	
				余笹川岩屑なだれ	
			30 万年前		分離丘陵の形成
				大田原火砕流堆積物	
			77 万年前	境林層	湖沼・沼沢地
		前期		白河火砕流堆積物	
				（侵食）	（隆起による陸化）
第三紀	中新世	中期		関谷層	
			1,000 万年前	鹿股沢層	
			1,600 万年前	福渡層	海底火山の活動（海底）

❷　先史・古代「豊かな縄文文化と古代の遺跡」

（1）那須塩原市の遺跡

①　那須塩原市の遺跡数

遺跡は、昔の人々の暮らした痕跡が土地に残された場所で、『那須塩原市遺跡分布地図』（以下『遺跡分布地図』という。）では、市内に 92 の遺跡が確認されました。これを基に、1 つの時代で 1 遺跡として整理したのが那須塩原市の時代別遺跡数の表で、約 13,000 年前の旧石器時代から約 450 年前の中世までの遺跡があります。

■ 那須塩原市の時代別遺跡数

時代		件数	割合
旧石器時代		1	0.7%
縄文時代		78	54.2%
	早期	9	6.3%
	前期	4	2.8%
	中期	9	6.3%
	後期	3	2.1%
	晩期	1	0.7%
	不明	52	36.1%
古墳時代		26	18.1%
奈良・平安時代		34	23.6%
中世		5	3.5%
合計		144	100.0%

・『那須塩原市遺跡分布地図』により作成
・１つの遺跡で複数の時代にまたがっている場合は、それぞれ１件とした。

那須塩原市では、旧石器時代から暮らしの痕跡が残っていますが詳細はわかりません。縄文時代に入ると、約 8,000 年前の早期から約 6,000 年前の前期にかけて、丘陵や山地の麓に、小規模な集落が短期間営まれていたと考えられています。約 5,000 年前から中期に入りますが、気候は温暖化し豊かな自然を背景として人口は大きく増加、那須塩原市においては平地部に比較的規模の大きな集落が営まれてきました。槻沢や井口をはじめ那須地区においても、大規模な集落ができました。

約 4,000 年前の後期から約 3 ,000 年前の晩期にかけては、気候の冷涼化で自然環境が厳しくなり、人口も減少傾向となります。これに呼応するかのように遺跡数は減少しますが、縄文人の営みは継続、縄文人の精神文化を物語る祭祀的な土器などが特徴的にみられるようになります。

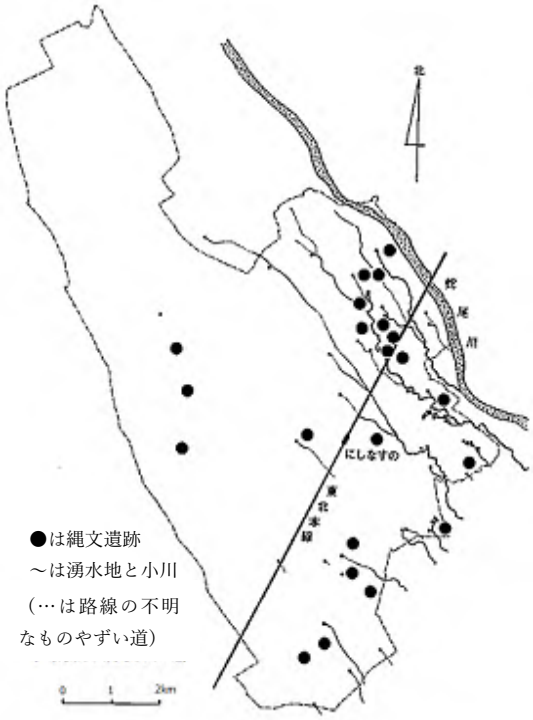
弥生時代の遺跡については確認されていませんが、関谷地区で発見されたといわれている弥生土器があります。

②　縄文遺跡と湧水・小川

縄文時代であっても、人々が生活を営むために水は欠かせないものでした。そこで、縄文時代の遺跡の立地と湧水地や小川との関係を見てみます。

右の図は、西那須野地区にある縄文遺跡と湧水地や小川を記したものですが、ほとんどの遺跡は水のある地域に立地していることがわかります。特に北東部の蛇尾川に沿った帯状の地域は、地下水が比較的浅く、湧水地が多く何本もの小川が流れる水の豊富な地域です。

槻沢遺跡はこの地域内の丘陵台地上に、井口遺跡は微高地上に遺跡が立地しています。縄文人は集落の近くの湧水地や小川に水場を設け、飲み水やトチの実のあく抜きに利用していました。



西那須野地区の湧水と縄文遺跡

（２）東北と関東の接点としての槻沢遺跡

槻沢遺跡の縄文中期前葉（約 5,000 年前）から後期前半（約 3,700 年前）は、大木式土器に代表される東北地方南部の土器と加曾利Ｅ式土器に代表される関東地方の土器が、時期によって差はあるものの重複して存在する地域で、東北地方南部と関東地方の両方の要素が混じりあった在地性が強く表れた土器も見られます。さらに、数は少ないですが中部～西関東系の土器や北陸の火炎土器の影響がみられる土器も出土しています。そこで、縄文中期前葉から後期前葉までを下の表に基づき８つの時期に区分し、槻沢遺跡から出土した土器の特徴を概観します。

■ 那須地域の縄文中期から後期の主な縄文土器の推移

縄文土器	分布の中心	中期初頭	中期前葉～中葉			中期後葉			後期前葉	
			１期	２期	３期	４期	５期	６期	７期	８期
大木系土器	東北南部									
阿玉台式土器	関東東部									
加曾利E式土器	関東地方									
火炎系土器	新潟県									
複弧文系土器	那須地区									
曾利式土器	中部高地									
両耳壺	西関東～中部									

「那須の縄文時代－袋状土坑・複式炉・配石と土器棺墓のころ」により作成

１～３期（中期前葉～中葉）については、１～２期は関東系の土器が主流となり、東北南部系の土器は１期から流入し関東系の土器を凌駕してきます。４～６期（中期後葉）は、東北南部系の土器が次第に衰退し関東系の土器が主流となってきます。５・６期には、山梨県甲府盆地を中心に分布する土器が加わり、６期には西関東～中部地方の両耳壺が加わってきます。７・８期（後期前葉）は、南関東系の土器が現れ、７期後半には、信濃川上流～会津地方に分布する土器が見られるようになってきます。

遺構についても、土坑（木の実などの食料を貯蔵するために掘られた穴）、炉（地面を掘り下げて作った火を焚くための場所）、住居跡、土器棺などで、時期によって東北の影響が強かったり、関東の影響が強かったりします。槻沢遺跡で東北と関東の両地域の影響がみられるのは、当地域が関東の北部にあり、東北との接点に位置していることによります。

一方で、東北や関東の影響を受けながら、それらの要素を融合し独自に生み出された地域性の強い土器や炉が見られます。槻沢遺跡では、東北系の複式炉でありながら、関東系の加曾利Ｅ式土器を埋設した箱型の炉が出現します。この複式炉は、「加曾利Ｅの複式炉」と呼ばれ、東北系の複式炉に関東系の埋設土器といった２つの地域の要素が融合した、地域性が強いものです。

縄文後期に入ると槻沢遺跡は、冷涼化による人口減少や文化の成熟を背景として、葬制や精神文化などの面で特徴がみられるようになります。葬制においては、この時期に亡くなった小児を深鉢形土器に入れて住居の近くに埋葬する土器棺墓習俗が盛行しました。精神文化面では、主に関東系の加曾利Ｅ式の深鉢形土器につけられた頭鳥形把手（鳥やヘビの頭の形をした把手）が出現します。頭鳥形把手は、出産や葬送に関わる儀礼の中で煮炊きに用いられ、儀式の過程で壊され捨てられたものと考えられます。

昭和 52 年の発掘風景

土坑の様子

加曾利Ｅの複式炉

大木式土器

加曾利Ｅ式土器

（３）古代の遺跡

①遺跡の種類

『遺跡分布地図』によると那須塩原市では、古墳時代の遺跡は約 18%、奈良・平安時代の遺跡は約 24%で、市内における古代の遺跡数は約 32%と 3 分の 1 を占め、縄文時代の遺跡数に次いで多くの遺跡があります。市内で確認された古代の遺跡の多くは、人々が住んでいた集落の跡であると思われます。また、古墳時代と奈良・平安時代の両方に比定される遺跡があることから、集落が古墳時代から連続していたと思われるものもあります。

②那須郡の十二郷

奈良時代の地方は、国・郡・里に分けられ、霊亀元年（715）頃に里は郷に改称され、国・郡・郷・里となりました。その後、里が廃止され郷が行政の末端組織として存続し、10 世紀初めに成立した『和名類聚抄』には、下野国に 9 郡 70 郷が見られます。

『和名類聚抄』によると、那須郡内には那須郷・大笥郷・熊田郷・方田郷・山田郷・大野郷・武茂郷・三和郷・全倉郷・大井郷・石上郷・黒川郷の 12 郷がありました。那須塩原市にある奈良・平安時代の集落遺跡は、那須郷に含まれたのではないかと推測されています。

❸　中世・近世「東北と関東を結ぶ街道、山岳信仰・温泉」

（１）那須野が原の中世の始まり

①源頼朝「那須の巻狩」

建久４年（1193）４月２日から 23 日までの間、源頼朝は自らの勢力を天下に知らしめるために広大な那須野が原で 3,000 人という大規模の狩りを催しました。この狩りは「那須の巻狩」と呼ばれ、その翌月５月にも行われた「富士の巻狩」に勝るとも劣らぬ規模であったと伝えられています。

頼朝の次男で三代将軍となった源実朝（1192～1219）は、後にこの「那須の巻狩」を想像して、「武士（もののふ）の矢並（やなみ）つくらふ籠手（こて）の上に　霰（あられ）たばしる那須の篠原」（『金槐和歌集』）と、うたっています。

②板碑

板碑は石造の卒塔婆（そとうば）で、鎌倉時代から室町時代にかけて死者の霊を供養するために建立されたものです。関東地方では秩父産の緑泥片岩を用いたものが多く、東北地方では安山岩や凝灰岩が用いられていますが、上厚崎の板碑と関根の板碑は武蔵型の影響が見られ、上黒磯の板碑は東北型に属します。関東と東北の特徴ある板碑が併存し、分布上からも大変貴重なものです。

また、上厚崎の板碑には「正慶二年」（1333）関根の板碑には「延文」年間（1356～60）の年号があり、ともに南北朝時代の北朝年号で、当時の那須塩原市域が北朝の勢力下に属していたことが知れます。

関根の板碑

上厚崎の板碑

上黒磯の板碑

（２）戦国時代末期の領知

①豊臣大名下の支配

市内には、塩原地区に３か所（塩原（要害）城跡・狭間城跡・離室城跡）、箒根地区に３か所（田野城跡・野沢（真木）城跡・鳩ヶ森城跡）、鍋掛地区に１か所（杉渡戸要害跡）の計７か所の城館跡が確認されています。城館跡は、自然の立地を生かした丘陵地や渓谷地にあり、軍事施設として山城や居館等の形態で、平安時代末期から室町時代にかけて築造されたものと考えられています。

中世の塩原・箒根地区は、主に塩谷氏や宇都宮氏の家臣、一部は長沼（小山）一族等に支配され、それぞれの城館は、宇都宮氏・会津長沼氏・那須氏間の抗争の地でもあったと考えられています。

那須地方における戦国時代の終焉は、天正 18 年（1590）に行われた豊臣秀吉による宇都宮仕置の結果、宇都宮氏、那須氏が改易となり、那須地区において大田原氏や大関氏などの新たな台頭による豊臣大名が誕生しました。改易の那須氏へは、秀吉から嫡子の那須資景へ旧領知の一部が与えられました。

領主名	豊臣秀吉領知目録に記された那須塩原市域の村々（塩原地区は不明）
那須資景	１８か村：黒磯地区３、鍋掛地区１、東那須野地区６、高林地区８の村々
大田原晴清	１５か村：西那須野地区５か村、東那須野地区６か村、高林地区４か村の村々
大関高増	５か村：鍋掛地区（野間村、樋沢村）、寺子地区（赤沼村、蛇沢村、石田坂村）

（３）近世の領知

①那須藩の廃藩と幕府直轄領の誕生

近世の初期、現在の市域には那須藩、大田原藩、黒羽藩、宇都宮藩の４藩領があり、那須郡と塩谷郡にまたがる分割支配地でした。しかし、寛永 20 年（1643）には那須藩が断絶して廃藩となり、その旧領知はすべて幕府直轄領になりました。

これにより、那須郡内に 26 か村もの幕府直轄領地が誕生し、幕府代官による直轄支配が始まり、これ以降の市域の支配関係に変化はありませんでしたが、幕末の慶応２年（1866）に塩原地区が宇都宮藩の分知によって誕生した高徳藩の支配となって明治維新を迎えました。異なる領主の支配関係の特徴として、隣村でありながら、それぞれに独自の文化が形成されました。

領主名	近世末期那須塩原市域の村々（旧高旧領取調帳による）
幕府直轄領	２６か村：黒磯地区４、鍋掛地区１、東那須野地区１３、高林地区８の旧那須藩領村
大田原藩領	４７か村：西那須野地区１２、黒磯地区２、箒根地区１３、東那須野地区１４、高林地区６
黒羽藩領	６か村：鍋掛地区２、寺子地区３、高林地区（板室）１
宇都宮藩領	４か村：湯本塩原村、上塩原村、中塩原村、下塩原村

（４）東北と関東を結ぶ街道の開通

①奥州道中の整備と参勤交代

江戸時代の初期に、徳川幕府によって江戸と奥州を結ぶ奥州道中が開かれました。この街道は、東海道・中山道・甲州街道・日光街道とともに幕府五街道の一つでした。

奥州道中は、江戸千住宿から陸奥白河宿まで 27 宿で、宇都宮宿までの 17 宿は日光街道、白沢宿から白河宿までの 10 宿が奥州道中と区分されていました。

那須塩原市内には、鍋掛宿と越堀宿が設置され、鍋掛宿から大田原宿まで２里 30 丁(約 11.2 ㎞)、越堀宿から芦野は３里(約 12 ㎞)、荷物の継ぎ立ては、鍋掛宿からは芦野宿までの下り荷を担当し、越堀宿は大田原宿までの上りの荷を担当して、鍋掛宿と越堀宿の２宿で１宿分の機能を果たすという、全国でもめずらしいケースの宿場でした。参勤交代では、奥州方面の 30 を超える大名家がここを通過しました。

②原街道の開通

原街道は、正保２～３年（1645～46）にかけて会津藩が会津米や特産物の運送道として整備した、現在の福島県白河市から栃木県さくら市氏家の阿久津河岸に至る街道です。この街道は、原街道のほかに原方街道・原方道・米積街道・米附街道などとも呼ばれ、街道の特徴としては、荷物運送の専用道のため問屋場以外に旅籠などの宿泊施設が無いことでした。

街道は、黒磯で奥州道中練貫に向かう道が分岐し、蛇尾川付近で槻沢を通過するルートと石林を通過するルートの２つに分かれ、槻沢ルートは薄葉で日光北街道に合流し、石林ルートは箒川手前の平沢を通り、阿久津河岸へ向かいました。街道は、現在の国道４号とほとんど変わらないルートでした。

③会津中街道の開通

天和３年（1683）の日光地震により男鹿川が堰き止められ、会津西街道が通行不能になり、その代替え道として、会津藩は元禄８年（1695）10 月に奥州道中氏家宿から会津若松に至る新たなルートを

幕府公道として開発しました。街道は、会津若松から南会津を経て、国境の大峠を越え下野国へ至り、会津側では松川通新道・南山松川通り・野際街道・宇都宮街道、下野側では会津街道・会津新街道などと呼ばれ、大峠越えの対応として、会津側に野際新田宿、下野側には三斗小屋宿が設置されました。

開通当初は、会津藩主の参勤交代３回、越後村松藩主１回で計４回の利用がありましたが、峠越えの難所が多いことや助郷不足の問題などにより利用がなくなりました。また、開通からわずか９年後の宝永元年（1704）７月には、幕府の公道から「脇街道」へ格下げになってしまいました。

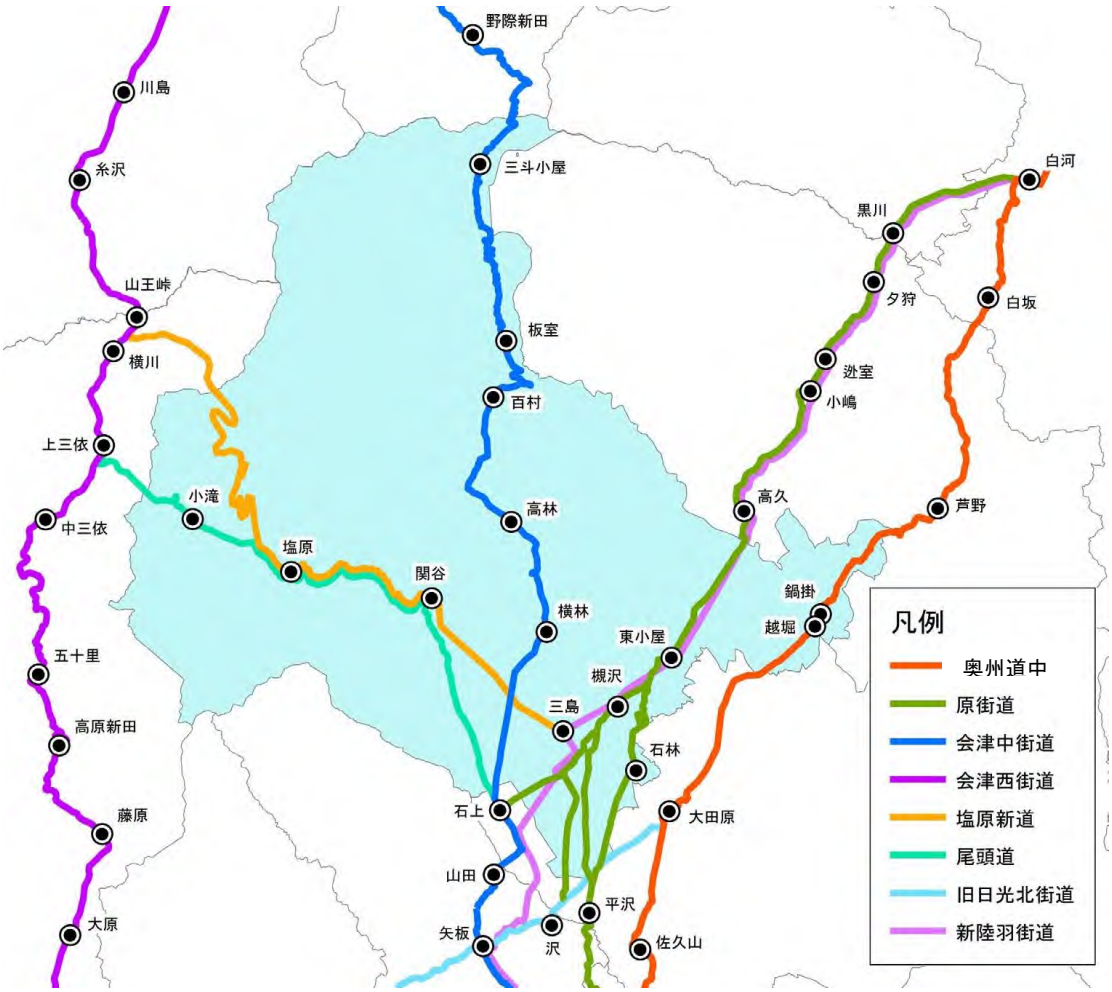
享保８年（1723）には、会津西街道が復旧して往来が盛んでしたが、会津街道の利用も盛況で、慶応４年（1868）の戊辰戦争では、街道沿線が会津藩などの旧幕府軍と新政府軍との激戦地となり、多くの集落が放火により焼失しました。街道は昭和以降に研究者の間で会津中街道と呼ばれました。

会津中街道 横林の一里塚

会津中街道 笹野曽里の一里塚

会津中街道 板室本村の一里塚

■　那須塩原市を通る街道



（５）用水の開削と新田開発

近世期には、那珂川・木ノ俣川・大巻川・小巻川などの那須東原北部に存在した川々を利用して、広大な那須野が原への飲用水や新田開発に次のような水利開発が行われました。

蟇沼用水

蟇沼用水は、慶長年間（1596～1615）に蟇沼・折戸・上横林・横林・接骨木の５か村の飲用水路として蛇尾川から水を引いた接骨木掘を起源とします。後に石林村まで延長され、さらに、安永２年(1773)には大田原城下に延長されました。この用水は、現在も灌漑用に利用されています。

巻川用水

巻川用水は、正保４年（1647）に唐杉・東沓掛・西沓掛・北弥六・前弥六・上厚崎・下厚崎の７か村の飲用水路として開削されました。取水地は熊川上流の大巻川で、総延長は約 18 ㎞に及びました。

長島堀

長島堀は、万治元年（1658）に那珂川上流の岩崎村から取水して、新田開発を目的に開かれた大規模な用水路で、長島新田村（123 石余）が誕生しました。その後、取入口が崩落、改修工事が行われたものの、延宝４年（1676）には廃堀となってしまいました。

穴沢用水

穴沢用水は、宝暦 13 年（1763）頃に、百村の枝村であった穴沢の村人たちが、飲用水を確保する目的で那珂川支流の木ノ俣川から約５㎞を自普請で開削したものです。その後、下流村々の要望により延長し、安永堀・細竹用水・木綿畑用水などが開かれました。その総延長は 25 ㎞に及び、現在はこれを総称して旧木ノ俣用水と呼んでいます。

山口堀

山口堀は、幕府代官山口鉄五郎が新田開発を目的として、文化７年（1810）に穴沢用水を拡張して開いた用水です。穴沢集落からは、ほぼ直線的に唐杉村や東小屋村方面に延びて、総延長は約 30 ㎞に及び、この水路によって約 208ha の水田が計画され、当時としては大変画期的なことでした。

■ 明治以前の主な用水略図

※『那須野ヶ原の疏水を歩く』などを基に国土地理院
基盤地図情報数値標高モデルを加工して作成

（６）山岳信仰と温泉

①白湯山信仰、黒滝山信仰、嶽山信仰

白湯山は、茶臼岳西側下方八合目付近の温泉の湧出源（御宝前の滝）を御神体として、山形県の月山に見立てた茶臼岳、毘沙門岳に見立てた朝日岳の三山を登拝する山岳信仰です。

江戸時代から昭和初期に至る長い間、栃木県北部や福島県南会津、白河地域の人々から多くの信仰を集めました。白湯山とは旧会津中街道三斗小屋宿の鳥居から入る登拝名で、那須塩原市域や黒羽、馬頭方面では「はくとうさん」と呼びましたが、南会津方面の登拝者からは「はくゆさん」と呼ばれました。また、那須湯本温泉神社から入る登拝名は「高湯山（たかゆさん）」と呼ばれ、旧暦４月８日に山開き、８月８日に山止めとなり、信者によって寄進された石灯籠や石仏などが現在も多く残っています。

黒滝山信仰は、寛政４年（1792）ごろに百村（那須塩原市百村（もむら））の東福寺・光徳寺・光雲寺・光照寺の４か寺院が中心となって創められた山岳信仰で、鴫内（しぎうち）の大日如来を起点として、大蛇尾川上流の黒滝山頂まで２日を要し、24 の札所を回るというものでした。札所は、滝や奇岩・大岩などを拝所として、川を渡り険しい山中に挑む登拝であったことが知られています。

嶽山信仰（たけさんしんこう）は、奈良時代から栄えた「高原山」信仰の流れで、古くは高原山一帯の山岳信仰のひとつでした。現在は、地元の有志などによって県内でも珍しい梵天奉納の行事が行われています。

三斗小屋宿 大日尊

白湯山石灯籠

鴫内 大日尊

嶽山箒根神社 奥の院本殿

②温泉神社

温泉神社は、那須地域を代表する神社であり、本市の特徴を示すものとしても重要です。市内では、建造物として指定等文化財となっている神社が塩原温泉に５社、板室温泉と三斗小屋温泉に１社ずつありますが、指定等文化財以外にも、村社として祀られてきた温泉神社が旧黒磯市域や旧西那須野町域の旧村のほとんどに存在しています。特に三斗小屋温泉神社の社殿彫刻は、日光東照宮の造営に携わった彫刻師が、三斗小屋温泉に保養に来た際に製作にあたったとの言い伝えがあります。

温泉地区にある神社は、宿場の繁栄と旅人の安全を守り、病を除くところとして古くから崇められ、農村にある温泉神社は、かつて那須氏の勢力圏内であることの象徴的存在であるといわれています。近世以降は、村人たちの拠り所として、五穀豊穣、家内安全、子孫繁栄の祈願所でした。

板室温泉神社

三斗小屋温泉神社

塩の湯温泉神社（塩原）

❹　近代・現代「那須野が原開拓と戦後開拓」

（1）那須野が原開拓と農場群

那須塩原市において、近代の象徴ともいえる那須野が原開拓は、「近代日本の縮図」ともいわれ、近代史において、重要な位置にあります。那須野が原は、近世の入会地から明治に入り官有原野となり、開拓が始められます。それは、明治政府の殖産興業政策に基づく、地方版の殖産興業でもあり、那須野が原の開拓事業は音を立てて歯車が動き始めます。

那須野が原は、40,300ha におよぶ日本最大の扇状地で、そのうち那須東原・那須西原を中心に11,000ha が原野であり、そこに明治の開拓が展開されます。地質的には扇状地特有の砂礫層と表流水の欠如、それに冬から春先の突風である那須おろし・高原おろしに苦しめられました。那須野が原開拓は、水と石と風との戦いであったといいます。それを克服して、今日の那須塩原市があります。

①大規模開拓の候補地調査

那須野が原は、明治政府の調査により、注目される原野地となります。明治 4 年(1871)には、「那須原其ノ外荒蕪地等為調査」のための測量調査が行われ、明治 7 年(1874)に、御雇外国人ジョーズによる牧羊場開設を目的とした荒蕪地調査が行われます。明治 9 年(1876)には、関八州大三角測量のため、シャボー・マクウェンらが那須と相模原を巡視し、明治 11 年(1878)に那須西原に基線測量の南北点が設置され測量が開始されました。また明治 9 年には、士族授産政策に基づく士族開墾地の選定調査が内務省の高畠千畝･南一郎平により進められ、選定されたのは福島県対面原外四原野で、その後明治政府による安積開拓が進められます。このように選定にあたっては、那須野が原が常に候補地として挙げられ、さらに、明治 17 年(1884)にマックス･フェスカの全県的な土性調査が行われました。

②県営那須牧場の開設と国営模範農場計画

明治 11 年(1878)に那須野が原が官有地に編入されることにより、大きく開拓の歯車が動き出します。明治 11 年 11 月に初代県令鍋島幹により県営那須牧場が開設されます。さらに、明治 13 年(1880)の開設を目指し、国の那須原模範混同農場が計画されますが、構想で終わりました。この時期、すでに民間農場の動きが活発となり、国主導の役割はなくなります。この二つの事業とも、農業版の殖産興業・欧化政策ともいえるもので、県営那須牧場は畜産と開墾を主体とし、国営の模範農場も欧米農法の一つである有畜複合農業を目指しました。つまり、明治政府は開拓地に、欧米式の大農法の定着を図ろうとしたのです。これは、北海道開拓をはじめ安積開拓など東日本の開拓地に展開されました。

③那須野が原農場群の創出

那須野が原には、那須野が原農場群ともいえる延 40 農場が創設され、それは民間農場群の創出でもありました。その中で、那須開墾社を代表とする地元の名望家(有力地主)による結社農場や個人農場が組織され、地域開発が行われます。地元の印南丈作・矢板武を中心とする那須開墾社は、明治 13 年(1880)に創業し、最大約 3,391ha を有し那須野が原最大の規模を誇りました。開墾・牧畜・植林が行われましたが、直営地経営の行き詰まりを解消し経営収支の黒字化を図るため、明治 21 年(1888)に土地は株主に配分され、明治 26 年(1893)結社は解散となります。土地を分配された株主の多くは、分配地の経営を那須開墾社に委託していましたが、那須開墾社解散後、正式に土地所有者となり、農場主とな

りました。那須開墾社よりも 2 か月先行して創設された肇耕社は、実質的に三島通庸が主導する鹿児島県士族による結社農場でした。

一方で、華族農場の集中がみられました。それは、40 農場のうち 19 農場に及び実に那須野が原の農場において半数が華族農場であり、面積も全体の 2 分の 1 に及びました。欧州の「土地持ち貴族」を範とし、土地所有を夢見る華族たちは、華族農場を創設し経営を継続して維持し、那須野が原開拓を推し進めたのです。

・地元の結社・個人農場―農場数:7(17.5%)　面積:約 5,514ha(27.9%)

・県外の結社・個人農場―農場数:14(35%)　面積:約 4,452ha(22.5%)

・華族農場――――――――農場数:19(47.5%)　面積:約 9,835ha(50%)

そして、開拓とともに避暑地として洋風別邸が建てられます。市内には、青木別邸や松方別邸・大山別邸が残されています。それがのちの那須のロイヤルリゾートとしてのベースとなります。塩原温泉においても、延 70 越える別荘群と大正天皇の塩原御用邸とも連動し、さらに新那須温泉の別荘地化と那須御用邸の建設へと進展し、一大リゾート地として発展して行きます。

那須開墾社第二農場社屋

三島農場の馬鈴薯の出荷風景

大山別邸

④開拓地の欧米式大農法と西洋化

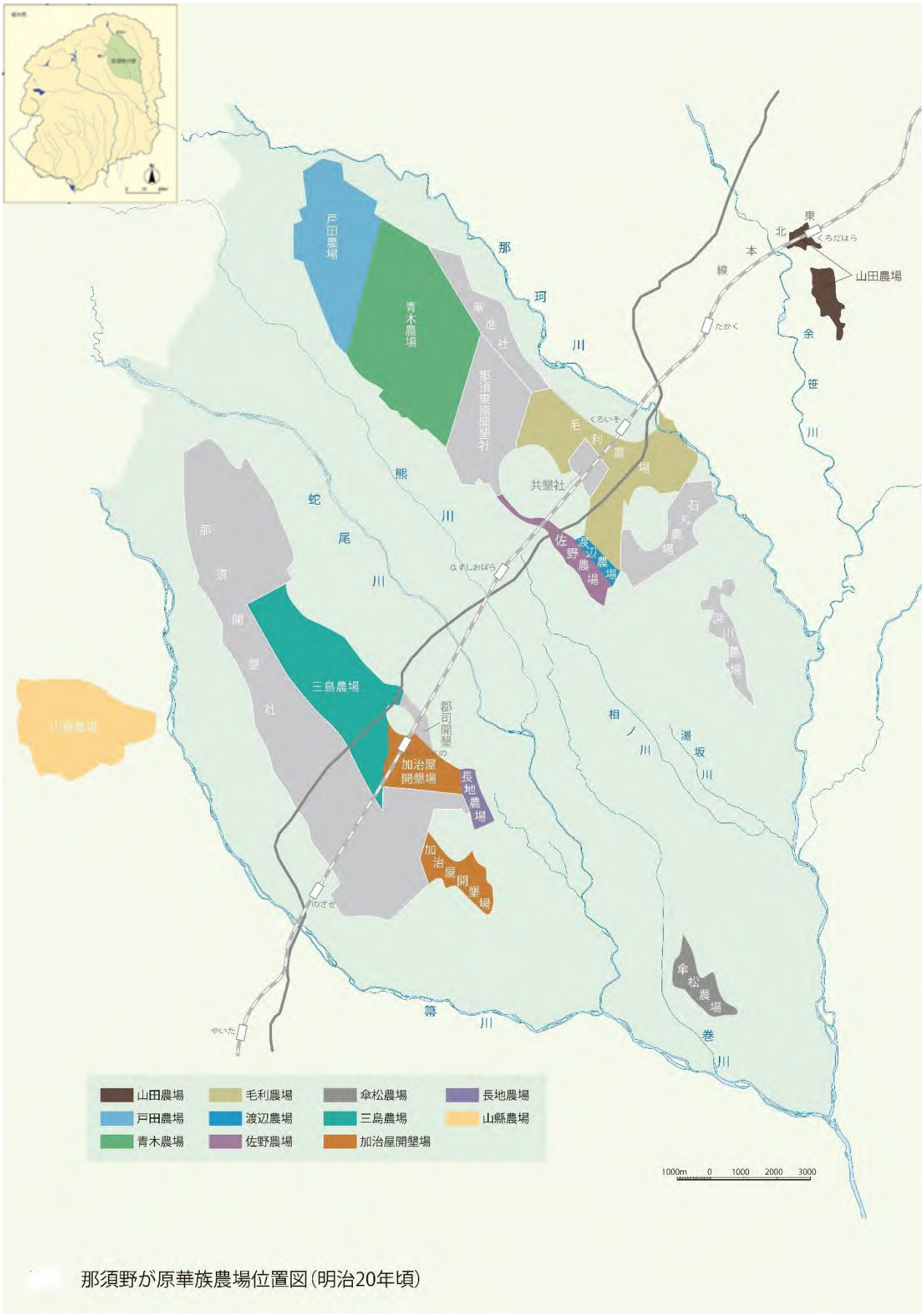
那須野が原は、西洋農具を導入して開拓が進められ、「大農法の実験地」といわれました。しかし、松方デフレによって大量の小作層が生み出され、後に各農場が小作制へ転換して行きます。

さらに、開拓地や周辺の地域において西洋化が進み、ぶどう栽培や葡萄酒(ワイン)が醸造されました。また、羊の飼育がおこなわれ、松方正義の千本松農場では多くの羊毛や羊肉が生産されました。牛乳の生産も盛んになり、すでに明治 14 年(1881)段階で那須開墾社により牛乳が生産され、塩原温泉や日光などに供給されました。一方、大山巌・西郷従道による加治屋開墾場や、その後を引き継ぐ大山農場では、牛乳生産が継続され戦後へと引き継がれます。そして、現在那須塩原市は本州最大の生乳の供給地となっています。つまり、那須塩原市の酪農の隆盛は明治の開拓初期から綿々と引き継がれて来たのです。

千本松農場のトラクターとプラオ

大山農場の牧舎とホルスタイン

千本松農場の羊


那須野が原華族農場位置図（明治20年頃）
戸田農場
青木農場
漸進社
那須東原開墾社
毛利農場
共墾社
佐野農場
渡辺農場
石丸農場
山田農場
三島農場
加治屋開墾場
長地農場
加治屋開墾場
傘松農場
山縣農場
那須開墾社
那珂川
熊川
蛇尾川
箒川
相ノ川
湯坂川
巻川
笹川
余川
東北本線
くろだはら
たかく
くろいそ
なすしおばら
のざさ
やいた
郡司開墾
山田農場
毛利農場
傘松農場
長地農場
戸田農場
渡辺農場
三島農場
山縣農場
青木農場
佐野農場
加治屋開墾場
1000m 0 1000 2000 3000

■　那須野が原の農場図

■　那須野が原の農場一覧

No.	農場名	開設年	開設者･経営者	爵位	肩書き	面積(町歩)	位置	備考
1	肇耕社	明治 13 年(1880)	三島通庸他			1,037	西原	明治 19 年解散
2	那須開墾社	明治 13 年(1880)	印南丈作･矢板武他			3,419	西原	明治 21 年分割
3	郡司開墾	明治 14 年(1881)	郡司忠平･磯金平他			50	西原	地元結社農場
4	加治屋開墾場	明治 14 年(1881)	大山巌･西郷従道			500	西原	明治 34 年分割
5	漸進社	明治 14 年(1881)	西山真太郎		馬頭町長	373	東原	明治 27 年分割
6	那須東原開墾社	明治 14 年(1881)	吉田市十郎他		大蔵小書記官	985	東原	通称「埼玉開墾」
7	東肇耕社	明治 14 年(1881)	深津無一他		大蔵主税官	683	東原	明治 19 年拝借替
8	佐野農場	明治 14 年(1881)	佐野常民･常羽･常光	伯爵	博愛社社長･大蔵卿	257	東原	
9	青木農場	明治 14 年(1881)	青木周蔵･梅三郎	子爵	外務大臣･独逸公使	1,586	東原	
10	石丸農場	明治 15 年(1882)	石丸安世他		大蔵大書記官	233	東原	
11	深川農場	明治 15 年(1882)	深川亮蔵他		佐賀藩士	254	糠塚原	
12	共墾社	明治 16 年(1883)	天野武三郎他		宇都宮警察署長	108	東原	
13	品川（傘松）農場	明治 16 年(1883)	品川弥二郎･平田東助	子爵	内務大臣	226	湯津上原	
14	山縣農場	明治 17 年(1884)	山縣有朋･伊三郎	公爵	総理大臣	762	伊佐野	
15	毛利（豊浦）農場	明治 18 年(1885)	毛利元敏･元雄	子爵	旧長府藩主	1,436	東原	
16	長地農場	明治 19 年(1886)	渡辺国武	子爵	大蔵大臣･福岡県令	101	西原	
17	三島農場	明治 19 年(1886)	三島通庸･弥太郎･通陽	子爵	栃木県令･警視総監	673	西原	旧肇耕社
18	戸田農場	明治 20 年(1887)	戸田氏共	伯爵	旧大垣藩主	883	東原	
19	山田農場	明治 21 年(1888)	山田顕義	伯爵	内務卿･司法大臣	111	黒田原	
20	渡辺農場	明治 21 年(1888)	渡辺千秋	伯爵	宮内大臣	136	大田原	
21	千本松農場	明治 21 年(1888)	松方正義･巌	公爵	大蔵大臣･総理大臣	1,650	西原	旧那須開墾社
22	矢板農場	明治 21 年(1888)	矢板武		下野銀行頭取	360	西原	旧那須開墾社
23	鳥山農場	明治 21 年(1888)	鳥山貞利		東京府会議員	152	西原	旧那須開墾社
24	大久保農場	明治 21 年(1888)	大久保利和	侯爵	大蔵省官吏	119	西原	旧那須開墾社
25	佐々木農場	明治 21 年(1888)	佐々木高行･高美	侯爵	参議兼工部卿	130	西原	旧那須開墾社
26	大島農場	明治 21 年(1888)	大島高任		日本鉱業会長	190	西原	旧那須開墾社
27	千坂農場	明治 21 年(1888)	千坂高雅･高節		岡山県令	72	西原	旧那須開墾社
28	野村農場	明治 22 年(1889)	野村靖	子爵	内務大臣･逓信大臣	375	糠塚原	
29	田嶋農場	明治 23 年(1890)	田嶋弥三郎		養蚕家	65	西原	
30	鍋島農場	明治 26 年(1893)	鍋島直大	侯爵	旧佐賀藩主	383	東原･糠塚原	旧石丸･深川農場
31	伊東農場	明治 28 年(1895)	伊東弥太郎		日本銀行員	160	西原	
32	若林農場	明治 30 年(1897)	若林謙次郎		肥料商	140	西原	
33	植竹農場	明治 32 年(1899)	植竹三右衛門		貴族院議員	375	糠塚原	旧野村農場
34	藤田農場	明治 33 年(1900)	藤田和三郎		薪炭商･県議会議員	842	東原	旧東原開墾社･漸進社
35	高田農場	明治 33 年(1900)	高田慎蔵		高田商会	190	西原	
36	大山農場	明治 34 年(1901)	大山巌･柏	公爵	陸軍大臣･元帥	273	西原	旧加治屋開墾場
37	西郷農場	明治 34 年(1901)	西郷従道･従徳	侯爵	海軍大臣･元帥	246	西原	旧加治屋開墾場
38	細川農場	明治 36 年(1903)	細川潤次郎	男爵	枢密院顧問官	68	西原	
39	甲子農場	昭和 3 年(1928)	甲子不動産			190	西原	
40	栄農場	昭和 13 年(1938)	村尾敏一		村尾汽船社長	229	西原	

※「那須野が原に農場を」（那須野が原博物館）
※ 網掛けは華族農場

⑤日本三大疏水・那須疏水の開削

農場の開設とともに、安積疏水・琵琶湖疏水と並び日本三大疏水に数えられる那須疏水が開削されます。

当初、地元の活性化のため、大運河構想が発案されます。福島や那須郡、塩谷郡の物産や物資を運河により東京へ運ぶというものでしたが、構想で終わります。明治 13 年(1880)以降那須野が原に農場が続々開設されますが、生活用水の確保が急務となり、飲用水路が政府の起業公債により通水し、さらに印南丈作･矢板武による政府への粘り強い請願により、灌漑用大水路としての那須疏水が造られます。

明治 18 年(1885)に 16.3 ㎞に及ぶ本幹水路が通水し、さらに那須東原に第一分水・第二分水が開削され、那須西原に第三・第四分水が開削されました。那須疏水の通水により、移住者の定着率が上昇ならびに地下水を涵養しますが、那須野が原の過酷な自然の前に水田化は一部にとどまります。水田化は、戦後の電気揚水の導入を待たなければなりませんでした。

那須疏水第一次取入口

那須疏水第二次取入口

那須疏水第四分水堰

（２）西那須野駅・黒磯駅を中心とした県北の経済

①日本鉄道会社線(東北本線)と駅の開業

明治政府は、明治 5 年(1872)に新橋－横浜間の鉄道を敷設しますが、政府の財政難により国営化を断念し、明治 14 年(1881)に東京－高崎間、東京－青森間鉄道敷設のために華族や商業者を中心とした民間の鉄道会社がつくられます。それが、日本鉄道会社です。なお、東北本線が国有鉄道となったのは昭和 4 年(1949)で、国鉄が民営化されたのは昭和 62 年(1987)です。

②西那須野駅の開業

西那須野駅は当初那須駅として、明治 19 年(1886)10 月 1 日に開業します。のちには塩原御用邸のための貴賓室も設けられます。さらに、駅前には、二大旅館として川島屋と大和屋が建ち並びました。旅館業だけでなく、塩原温泉への交通の便も果たし、当初の人力車から外車を導入しての乗合自動車やバスも運行されました。このため、西那須野駅は「塩原温泉の玄関口」と呼ばれ、多くの温泉客の送迎駅となりました。また、那須地方では木材や薪炭が盛んに生産され、活況を呈します。さらに、大田原市街へ向かう那須人車軌道(後に那須軌道)、塩原温泉の観光鉄道としての塩原軌道(後に塩原電車)、旅客輸送とともに八溝山地の木材などの輸送に活躍した東野鉄道の 3 路線が西那須野駅を起点として敷設されました。

西那須野駅構内

西那須野駅前の大和屋

西那須野駅前の川島屋

③黒磯駅の開業

黒磯駅は、明治 19 年(1886)12 月 1 日に開業しました。県北の主要駅として、黒磯機関庫の設置や交流と直流の切り替え駅であり、那須御用邸へ向かわれる皇族方の貴賓室が残されています。

黒磯駅も駅前に小松屋支店と煙草屋の二大旅館が建てられ、併せて那須温泉への自動車運転が行われました。また、高木慶三郎による枕木生産が行われ、駅前には多くの枕木が積まれ、日本一の枕木生産を誇りました。さらに、この地方の主要産業であった林業を中心に、西那須野駅とともに木材や薪炭の積出し駅として地域経済を支えました。

黒磯駅と貴賓室

黒磯駅前の小松屋支店と煙草屋

黒磯駅前に積まれた枕木

（３）明治期からの塩原温泉の隆盛

①塩原新道・東北本線西那須野駅の開業

山形・福島・栃木と県令を歴任した三島通庸は、東北経営の一環として、栃木県においては陸羽街道の整備とともに塩原新道の開削に乗り出します。塩原新道は、明治 17 年(1884)1 月に着手し、同年 5 月には道が開かれ、三島で開通式が行われました。これにより、栃木県を含めた東北南部と東京が直結することとなります。しかし、三島が内務省へ転任後、土砂崩れなどにより福島県境の道は廃絶され、塩原新道はもっぱら塩原温泉への道として機能することになります。

また、東北本線(当初日本鉄道会社線)の敷設により、那須西原の開拓地に西那須野駅(当初那須駅)が開業し、塩原温泉は東京と直結することとなります。さらに、西那須野駅から塩原電車（当初機関車による運行により「塩原軌道」と称した）が開通し、最終的には途中の蟇石(がまいし)まで路線を伸ばし、塩原温泉への足として多くの温泉客を運びました。観光鉄道としては全国的に珍しいものでした。

三島村の街道式場の様子
『三県道路完成記念帖』
（高橋由一作）より

西那須野駅前の旅館の呼び込み

塩原へ向かう塩原電車

②政府高官・文人墨客の来塩

三島通庸の塩原新道の開削や東北本線の開通による西那須野駅の開業、さらに塩原電車の開業は、それまで会津や日光に向いていた塩原の人々の視線を、西那須野や東京へと向ける契機となりました。また、東京方面からの来塩者も増え、松方正義や山縣有朋・品川弥二郎・平田東助・大木高任・佐佐木高行など、多くの政府高官が塩原温泉へ来ることになります。一方、塩原の渓谷美に魅了され、奥蘭田や尾崎紅葉・徳冨蘆花・国木田独歩・長塚節・田山花袋・室生犀星など文学界を代表する文人たちも訪れ、盛んに塩原を題材とした小説や随筆が執筆されました。また、近代の画家たちも塩原の風景を絵画や版画に収め、日本近代洋画の祖といわれる高橋由一や日本画家の山元春挙・版画家の川瀬巴水・洋画家の刑部人などが塩原の絶景を描きました。

③塩原別荘群と塩原御用邸

塩原の良質な温泉と箒川の渓谷美に魅了された人たちが、別荘建設へと動き出し、福渡や塩釜に続々と建設されました。明治 22 年(1889)段階で、華族を中心に 12 の別荘が建てられていました。その多くは、緑色凝灰岩(グリーンタフ)の岩盤が硬く、渓谷沿いにせり出すように建てることができ、渓谷美を堪能できることから、エメラルドグリーンの箒川渓谷沿いに建てられました。

こうした中で、大正天皇は皇太子時代から塩原をこよなく愛し、中山別荘や三島別荘に長く滞在しました。これをきっかけに、三島家は自身の別荘を皇室に献上し、明治 37 年に塩原御用邸となりました。こうして、塩原温泉は一躍皇室の御静養の地となったのです。三島家は献上後、塩原御用邸の隣に新たに別荘を建設しました。そのころの別荘所有者は 17 名ほどでしたが、昭和 10 年(1935)には実業家を中心に 45 名が別荘を所有し、延 70 を超える別荘が塩原温泉に建設されました。

塩原御用邸

塩原三島別荘

天皇の間記念公園

（4）戦後開拓と国営事業

①戦後開拓の入植地

那須塩原市は、戦後の食糧増産、復員軍人や海外引揚者などのために、明治の開拓とは別に戦後の開拓地となります。特に黒磯地区においては、那須町とともに多くの引揚者による集落が形成されました。昭和 30 年(1955)の営農調査によれば、那須塩原市の入植戸数は、旧黒磯市 573 戸・旧西那須野町 66 戸・旧塩原町 83 戸を数え、県全体の 24%を占めました。各開拓地は畑作中心に進められましたが、火山灰土のやせた土地や冷害等に見舞われ、酪農や高冷地野菜などに転換しました。やがて酪農の機械化により、現在那須塩原市は本州最大の生乳生産地となりましたが、それは、明治の開拓からの牛乳生産とともに戦後開拓における酪農が大きな役割を果たしました。

②国の農業関連施設の設置

戦前において、千本松地区に国の機関である農林省馬事研究所と国立栃木種馬所が開設されます。戦後になると、農林省馬事研究所は農林省関東東山農業試験場となり、昭和 45 年(1970)には農林省草地試験場、そして、現在は国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構畜産研究部門畜産飼料作研究拠点として、良質で安全な畜産物の生産のために草地・肥料作物の研究を進めています。

一方、国立栃木種馬所は戦後栃木県が借り受け昭和 26 年(1951)に栃木県種畜場那須分場として開設します。その後、機構改革により栃木県酪農試験場(現栃木県畜産酪農研究センター)となり、酪農に関する研究や牛の改良増殖に関する研究、飼料に関する研究などが行われています。

③昭和の国営開拓事業

昭和 42 年(1967)に国営那須野原開拓建設事業が着工し、農業用水の安定供給を図るために深山・

板室ダムの新設をはじめ、西岩崎頭首工などの改修や那須疏水の水路のコンクリート化、各用水施設の整備が行われました。併せて 408ha に及ぶ農地造成と 553ha の区画整理を行い、営農形態の変化と計画面積の変化に伴う水源計画の見直しに基づき、赤田と戸田に新たに調整池を整備していきました。戸田調整池には、国営土地改良事業では国内初の小水力発電事業として那須野ヶ原発電所が整備されました。また、関連事業として電源開発株式会社の沼原発電所や栃木県営板室発電所・北那須水道も建設されるなど、農業・農村整備と地域活性化を進める那須野が原総合開発の主要な事業が行われました。

本幹水路の改修工事

蛇尾川の水管橋の建設工事

深山ダムの建設

④那須学園都市と首都機能移転候補地

昭和 45 年(1970)に、800ha の平地林を有する千本松地区に学園都市とインダストリアル・パークの建設構想が出されます。新国土計画の中で、赤城山麓都市・富士山麓都市とともに誘致運動が行われ、筑波研究学園都市の実現で幻の計画に終わった経緯があります。その後、当時の大田原市・西那須野町・黒磯市・塩原町の一部に中核都市を建設する構想へと変わって行きます。

さらに、平成 2 年(1990)に「国会等の移転に関する決議」を踏まえ、平成 11 年(1999)の国会等移転審議会で移転先候補地として、北東地区の「栃木・福島地域」が選定されました。その中心が千本松地区で、クラスター(ぶどうの房状)方式による都市計画を構想しましたが、現在は凍結状態となっています。なお、誘致の際に那須野が原を眺望するために、那須野が原公園にサンサンタワーが建設され、観光にも役立っています。

⑤東北自動車道と西那須野塩原・黒磯板室インターチェンジ

東北自動車道は、昭和 47 年（1972）の岩槻－宇都宮インターチェンジ間の開通を皮切りに、宇都宮－矢板インターチェンジ間が翌年開通します。昭和 49 年(1974)に矢板－白河インターチェンジ間が開通し、同年に西那須野塩原インターチェンジの供用が開始されました。黒磯板室インターチェンジは平成 21 年(2009)に整備されました。

那須塩原市は、県北の交通の要衝であり、国道 4 号・東北本線・東北自動車道、さらに東北新幹線が通過するなど、国の動脈が市の経済の要として機能しています。

農研機構畜産草地研究所

赤田調整池とサンサンタワー

西那須野塩原インターチェンジ

❺　民俗文化「那須野が原のくらしと文化」

（1）那須扇状地の語部

①デガマ（出釜）と石ぐら（石塚）

砂礫層が多い那須扇状地は、扇央部から扇端部にかけてデガマ（出釜）と呼ばれる湧水地付近、あるいは、那珂川や箒川沿岸部に人の営みが生まれ、年中行事や祭りなどの生活文化を育くんできました。明治期の那須野が原開拓による移住者も、那須疏水の水を頼りに故郷の生活文化を那須野が原の風土に生かしてきました。そして、古くから人の営みがあった旧村と明治以降の開拓地との交流を通して、今日の那須塩原市のくらしと文化を築き上げました。

開拓地では、毎年、畑の耕作のため石を掘り出し積み上げ、石ぐら（石塚）と呼びました。石ぐら（石塚）は、豊富な物資を貯蓄する蔵は持てないが開墾の苦労を詰め込んでいるという、開拓魂を誇る意味から付いた名とされます。西那須野地区では、積み上げられた石ぐら（石塚）が数多くありましたが、昭和 20 年代になると、地下水を汲み上げる電気揚水が盛んになり、石ぐらの石は畔の補強のための石垣にしたり開田のために地下に埋められたりして、そのほとんどは姿を消しました。

西遅沢のデガマ（出釜）

太夫塚の石ぐら（石塚）

井口の温泉神社

②ヤウラ（防風林・屋敷林）と列状集落

那須連山から吹き降ろす初冬から春先にかけての那須おろしや高原おろしを和らげるために、各家の北側に設けられた防風林はヤウラと呼ばれました。ヤウラは防風林のみならず、家材としても大切にされました。開拓地の農場の一部では、土盛りを高くし土手を北側に作って杉や雑木を植えた防風林もありました。

奥州道中や会津中街道などの街道沿いの江戸時代に作られた用水沿いには、列状の集落が形成されました。特に、箒川の氾濫を避けて河岸段丘沿いに集落を移動して計画的に家並みをそろえた高阿津地区の列状集落は、日本有数の景観をつくり出しています。

また、〇〇新田という地名が多くあります。これらの地名は黒磯地区に多く、江戸時代初期に新しく開墾されたので付けられた地名です。

那須扇状地の扇頂部から扇央部に位置する那須塩原市は、古くから水との闘いを通して、くらしを築き文化を育んできました。列状集落や〇〇新田という地名も、民俗文化の語部なのです。

ヤウラ（防風林・屋敷林）

大貫地区の列状集落

（2）馬のいたくらしと文化

①農耕や運送に欠かせない馬

砂礫層が厚く水が乏しい那須塩原地域では、農業の中心は葉煙草栽培や養蚕の桑を栽培する畑作が中心のくらしでした。地力の弱い土地は、ヤウラや近くの雑木林でかき集めた木の葉を堆肥にして田畑にすき込み土づくりをしました。雨水がすぐに浸み込む表土は乾いて固いため、土起こしや耕作には馬が重要な働きをしました。

ほとんどの農家は、家の中の日当たりのよい東側に馬小屋をつくり、家族同然のように大切に飼いました。馬が踏みしめた枯葉や枯草は厩肥（きゅうひ）と呼び、近くの雑木林から掻き集めた木の葉にすき込み発酵・腐敗させ堆肥をつくる大切な材料になりました。

奥州道中・原街道・会津中街道などの歴史の道や明治以降の鉄道と結びついて、農閑期を利用した馬車引きという運送業が地域の流通経済を支えました。ここでも、馬は貴重な現金収入の役割を担っていました。馬は、扇状地の那須野が原の耕作や荷物運送に欠かすことができない存在だったのです。

鍋掛の葉煙草畑

馬耕

馬による運送

②那須連山の裾野を駆ける馬

起伏のある広大な那須野が原の丘陵地を利用して、明治 23 年（1890）には豊浦農場（現黒磯小学校）に競馬場を設置して駿馬育成の牧牛馬畜産会社が設立されました。日清日露戦争や第二次世界大戦では軍馬が必要となり、農家では農耕馬以外にも数頭飼育するようになります。

那須塩原地域の馬がいたくらしは、馬への信仰を高めさせ、矢板市の玉田にあるショウゼンサマ（勝善様）を祀る生駒神社は、市内各地域の信仰を集めました。また、農耕に運送業に、そして、戦争にも活躍した、馬のいたくらしと文化を刻む馬頭観音や生駒明神、あるいは、軍馬慰霊碑という石塔や石碑は、戦争による日本の近・現代史も語っているのです。

本郷町の馬頭観世音

高林の軍馬慰霊碑

井口の生駒神社

（3）養蚕とくらしの文化

①地理的条件を生かした養蚕のくらし

明治期の那須野が原開拓による長野県や群馬県からの移住者が多い西那須野地区の那須開墾社では、故郷で行っていた養蚕を行うようになり、三島農場にも広がっていきました。蚕と桑、ともに生き物を扱う養蚕は、一年に 3 回ほど、一回に 40 日ほどかけて繭が出来上がりますが、集中しての作業と労力、天候不順になれば生活にもかかわる大変な仕事です。

繭を作る蚕は、大量の桑の葉を食べます。蚕は 4 回ほどの脱皮を繰り返して繭を作りますが、脱皮する時は一番神経を使います。また、蚕が桑の葉を大量に食べる繁忙期には、一家総出の作業になります。桑畑も桑苗の手入れはもちろんのこと、畑の地力をつけるために、農閑期の秋から冬にかけての木の葉さらいも大切な仕事でした。那須扇状地の扇頂部から扇央部に位置する黒磯地区・西那須野地区・塩原地区には雑木林が残り、水利の効かない畑地の養蚕を支える優れた地理的条件を持っているのです。さらに、国策としての近代養蚕の歴史を担った西那須野地区には、那須疏水と東北本線の利便性を生かした製糸工場もありました。

三島の桑畑

農家での飼育

大和組那須野製糸所全景

②養蚕くらしを支えた信仰と神社

養蚕農家は、蚕と桑という自然から生まれる生き物を相手にしたくらしを営みます。自然と深く関わるくらしは、自然に対する畏怖の念を育て養蚕信仰を篤くします。

長野県や群馬県では蚕の神様を「コダマサマ」とか「コカゲサン」と呼びならわしましたが、茨城県の筑波山の麓の蚕影山神社や日立の蚕養神社に関係しています。西那須野地区の養蚕農家は、これら茨城県の養蚕神社にお参りしたりお札をいただいたりして、養蚕の豊作祈願のお祭りをしました。太夫塚の丘陵にある淡島神社は、元は養蚕神社ではないのですが、製糸工場が盛んだった時代には、3 月 3 日の縁日に女工さんたちが参詣し大いに賑わったそうです。

現在は、養蚕農家は激減しましたが、各地域に残されている養蚕神社は、近代養蚕が盛んであった歴史と文化を語りついでいます。

三区町の蚕影神社

一区町の蚕金神社

太夫塚の淡島神社

（4）歴史の道とくらしの中で育まれた民俗芸能

①歴史の道に花開く民俗芸能

那須塩原市に残る民俗芸能は、江戸時代の奥州道中・原街道・会津中街道など、歴史の道の文化交流によって伝播しくらしの中で支えられ育まれてきたところに、その特色があります。

大貫地区や関谷地区に残る城鍬舞は、大田原城の完成時に上石上地区の農民が余興で舞ったという伝承が残されています。大田原市の上石上温泉神社に奉納される城鍬舞と芸態や由来もほぼ同じなのは、こうした街道の交易がもたらした伝播過程を示しているからです。遅沢ばやしも、歴史の道の文化交流がもたらした民俗芸能と言えるでしょう。

百村の百堂念仏舞は風流系獅子舞から派生した民俗芸能ですが、会津中街道の文化交流を示す民俗芸能です。江戸時代中期には、すでに栃木県内に広く伝わっていた一人立三匹獅子舞の系譜に連なる那須塩原地域の獅子舞の由来や舞い方の伝承は、宇都宮上河内の羽黒山を舞台とする藤原利仁将軍の兄弟鬼退治伝承や平家の落人伝説と結びついています。多彩な伝承や多様な継承過程を残しつつ、民俗芸能という豊かな生活文化が形成されました。市内各地域の神社に奉納される神楽なども、くらしの中で生まれた大切な民俗芸能です。

関谷の城鍬舞

百村の百堂念仏舞

遅沢ばやし

②民俗芸能がつなぐくらしと文化

砂礫層が厚く耕地に乏しい那須塩原地域のくらしの中では、季節の節目に鎮守の杜で催される祭礼が支えでした。地域の若者を中心に演じられた獅子舞や神楽は、豊作祈願・家内繁盛などの祈りだけではなく、地域の連帯やコミュニケーションとして機能していました。

しかし、生活環境が大きく変容した現代の那須塩原市では、地域の連帯感や寺社に対する畏敬を母胎とする信仰が薄らいで、民俗芸能は、地域づくりや地域活性化に重要だと言われながらも、後継者不足による芸態・道具の維持管理の困難さなどから中断されたままのところも多くなりました。

獅子舞などの民俗芸能は、「風流（ふりゅう）物」と呼ばれています。風流とは、その民俗芸能が生まれた時の形（流行（はやり））や信仰が時代を超えて、演じる者と観る者とで練り上げて今日に伝えた芸能です。また、民俗芸能の多くは、地域の若者たちが支え継いでできた文化です。その精神は、那須野巻狩まつりや那須疏水太鼓など地域の連帯を生む郷土芸能や演劇（那須野の大地）に継承されつつあります。

那須野巻狩まつり

子ども疏水太鼓

那須野の大地